江戸名所図会 巻之十七

124
20
114

国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 124-114

ガラス使用

江戸名所図会

七十

124
20
114

東京圖書館

和書門	地理類	礼函	六架	二〇號	二〇冊

国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 124-114

ガラス使用

久留島文庫
東京帝国大学図書館
故紙原物型紙本

下谷岡

上野のあなたを指て

武蔵國風土記殘篇曰　豊嶋郡下谷岡貢鹿狐兎狸山鴿雉雀等又

貢蕃薯蕷松脂云云

五條天神宮　東叡山の巽の麓瀬川氏の地よりあり桑神少彦名命

一坐　本朝醫道の祖神也　五條天神と称す

北野天満宮を相殿とす

菅神の像の寛永十八年遷眼大体年眼あり

社殿の相殿より

当社もと東叡山のうちなりしの寛永寺草創の砌御連

歌師瀬川昌億の宅地より遷させらるの夜白木神事を行す

北國記云　正月の末ひさしみのさらい是の出より優遊しくり法堂の社

五條天神と申すより折りしく茅原を焼くり

寛りをきてきれりの巷の初草より是の出の参社の前　竟惠

宝王山常楽院　長福寿寺と号す天台宗五條天神の南巽川の向

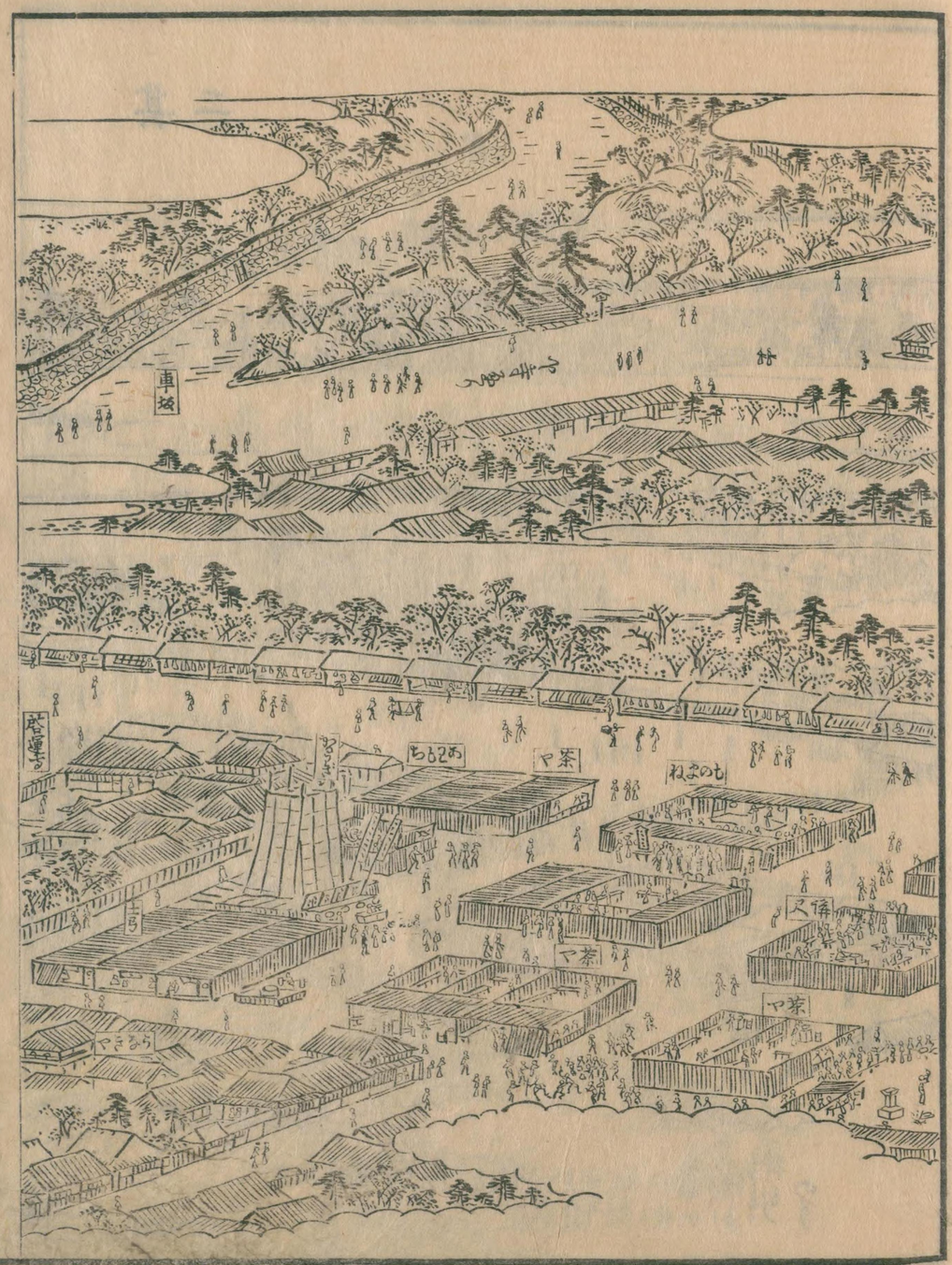
よりの牽多阿弥陀如来の行基大士の作りて六阿弥陀第五番目な

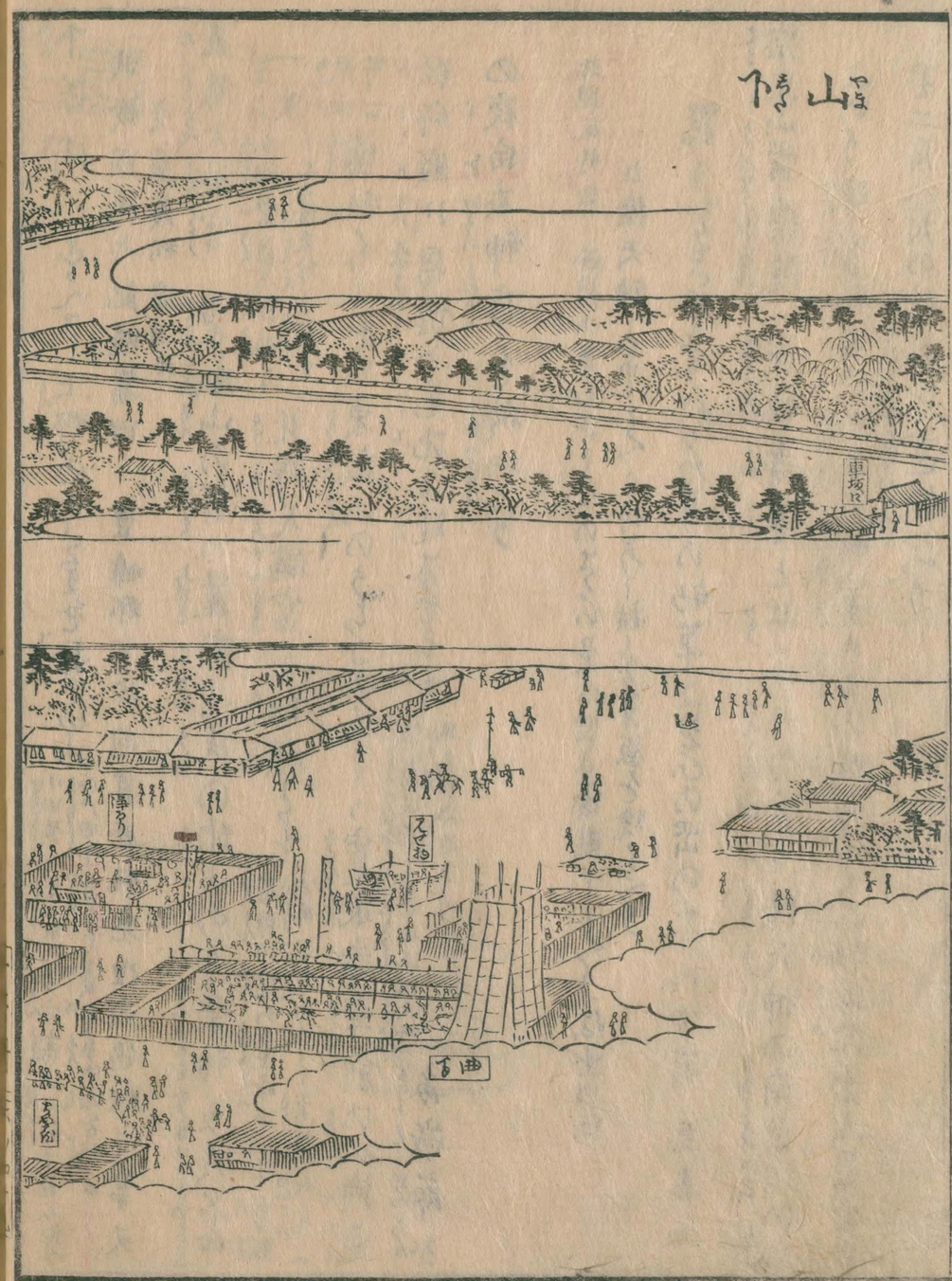
毎歳節分

正二月八月の彼岸中甚振いて

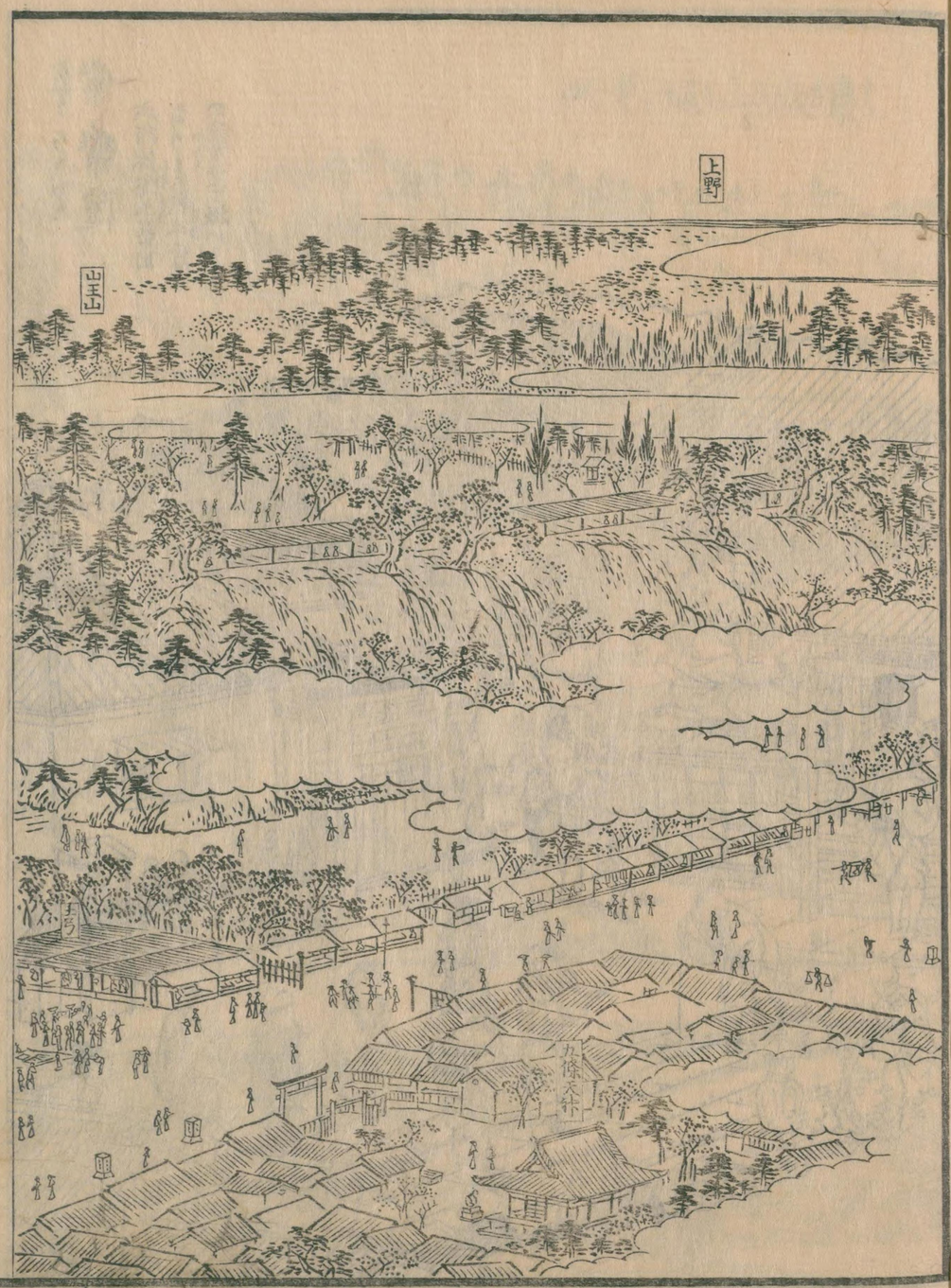
小林藏書

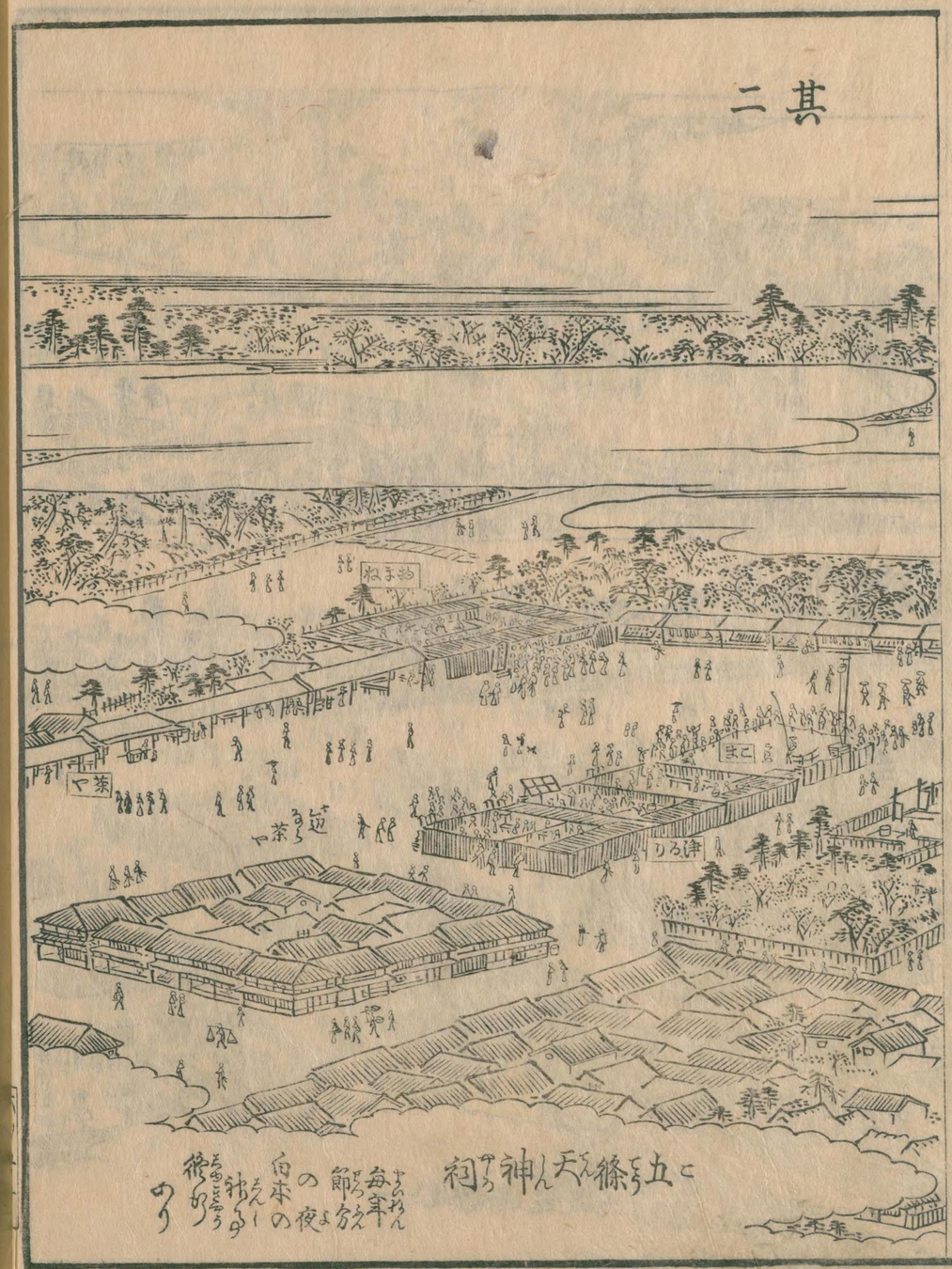
国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 124-114　ガラス使用



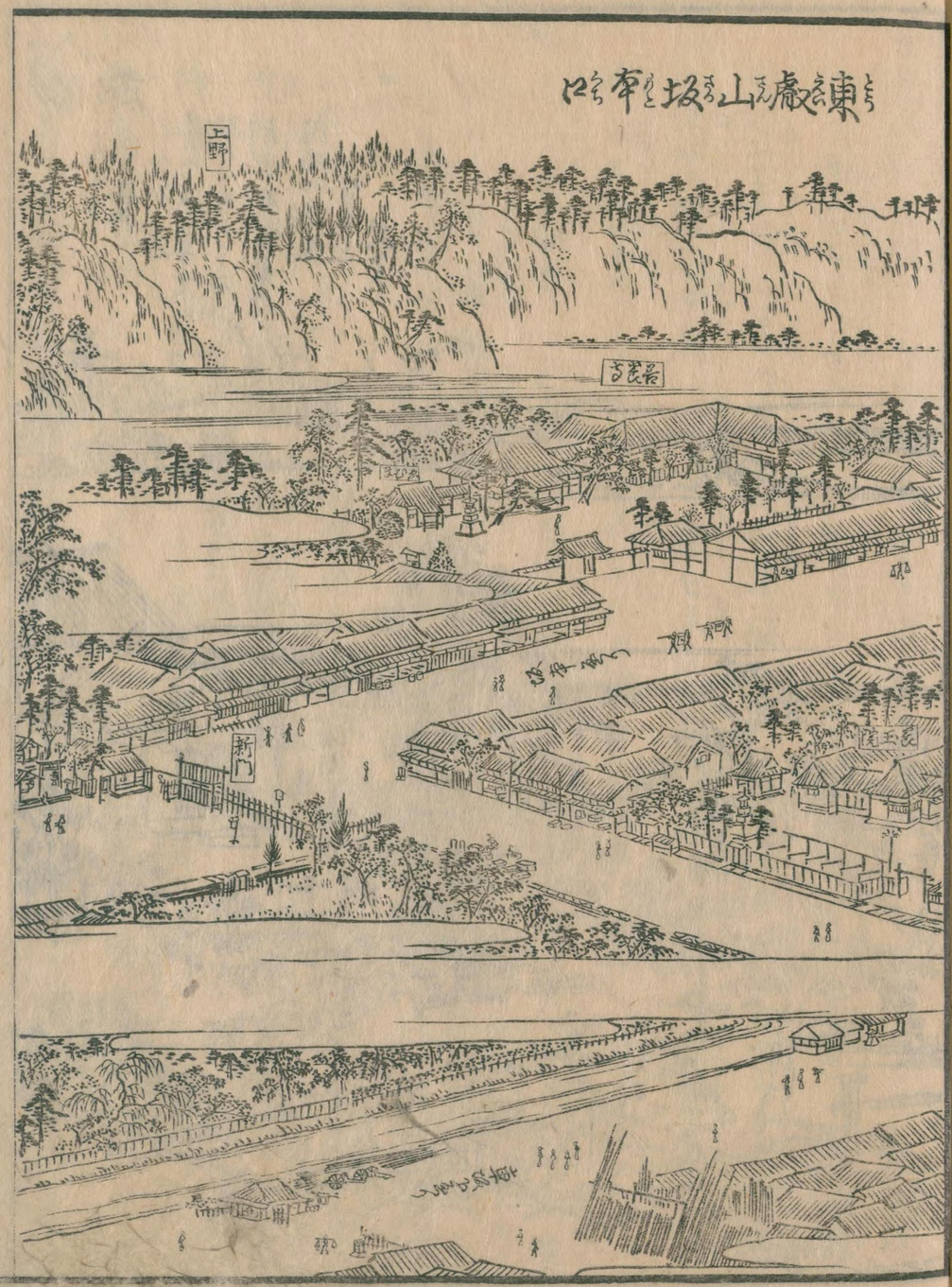


国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 124-114
ガラス使用





国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 124-114
ガラス使用



国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 124-114
ガラス使用

入谷
廣円堂

喜蓮院より安置
せしの仁王なるの
青面金剛と
同作の霊像
なりと
いふ

金光山瑞玉院　下谷坂本壹丁目の南にあり天台宗にて往昔より今
の御堂内大きの辺りにあり〳〵と慶長の頃今の地に遷さるる往
古は三藐院と号けるを宝永年間今の名に改るとなり當寺は釋迦
の涅槃像の画軸一幅を藏せり慈眼大師の讃あり三國傳燈大
僧正天海書とあるなり毎年二月十五日是を掛る

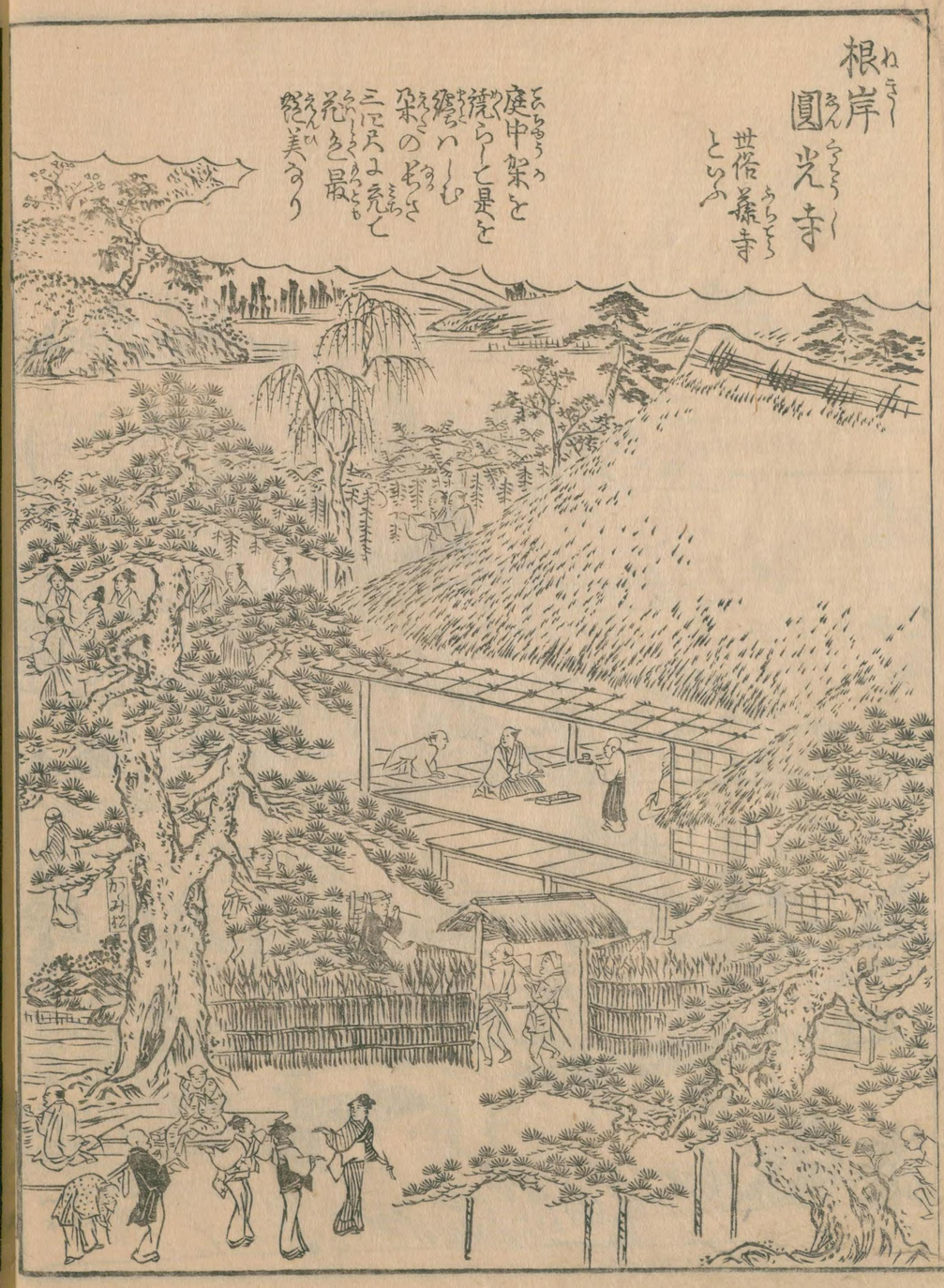
薬王山善養寺　延壽院と号す同所坂本壹丁目の左側にあり天台
宗にて本尊は薬師如来を安置
寺僧云此寺にある小祢原橋明神の本地佛なり
とも當寺薬師堂に相対せりとなり
當寺は天長年中慈覚大師の草創なるも同大師
の作なりといふ額に圓満の二字を刻し黄壁水庵老人の筆なる
境内に閻魔堂あり閻王の像は運慶の作なり正月七月十六日參
詣群集す　或人云〳〵當寺閻王の像は所列豆利學校にあり〳〵
小野照崎明神社　同所三丁目の右側にあり奈神奈儀小野篁の
霊なりといふ社傳あれども詳らかならず姑く略す當社は坂

牽の鎮守まして八月十九日を以て祭日とす列當は天台宗まして

小野山嶺松院と号す

或人云當社は其先思ひ出よ堂あり〳〵頃その傍よりて小祠ぬれと拾と小祠菅こふく儒教を崇敬〳〵序列足利よ學校を開くなり其後彼地よ堂の傍よ堂の傍よ堂の傍

国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 124-114
ガラス使用



国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 124-114
ガラス使用

時雨岡　同所庚申塚とゝろより三四丁艮の方小川より僅に一株の古松のもとより不動尊の草堂あり土人此松を御行の松と号す由い姑くこゝに省畧を　一小時雨の松ともよゝる

田園雑記　是この岡とゝろ所々に松原のあり

霜の後あらられかゝり村雨をゝ是しの岩の松もうひれし　道真淮后

按ずるに是とゝろの東敵山の旧名なり此説も東敵山より連綿たれい同園雑記より出る

ところの和歌の意を取て後世好事の人の号けしなるべ

東陽山正燈寺　龍泉寺町にあり妙心寺派の禪刹にして兼應三年に愚堂和尚草創せ　和尚の大田宝鑑國師と諡号を天性明敏にして当寺禪傷の偈傳を撰起せ宝鑑國師の説録にはまひるるり

の後園楓樹多し　其先山城高雄山の楓樹の苗を栽と云　晩秋の頃い詞人吟客らゝ群遊し

其紅艶を賞せ

真賞山西光寺　義輪新町にあり俗に土宗にして長和元年の草創

なり本尊阿弥陀如来い恵心僧都の作冥山い至蓮社賢誉上人たり

千束郷　龍泉寺町の辺今僅の地をいふ一に篠堤と字せ菊岡

沾涼の説に此地を佐く律見の里とも号くとあるい誤なりこの境て

義経あり千束稲荷と称せ

或人云往古い上ゝとゝろれて伐草天王町の辺ゝ役の場際迄をもいふくるに来なといひるとゝ

仍て按に伐草寺五徳山年の撞の銘に武州豊島郡千束の金龍山伐草寺とあり又同

境内に西宮稲荷と称せるあり里老傳へて是を上古東夷書に千束の内に阿佐谷分三戸村石濱茅の地を古因幡六郎同石濱熱海の地を古

因大猪亮同金枝村の地を飯倉彌四忠同近藤村の地を島津徐七郎同朝倉分の地を

江戸番匠等領ゝるとゝろなり其地の廣大なるとゝろへし

本戸三河守源孝範茅宅舊跡　傳云今三河嶋と称せるゆい三河守居

住の舊跡なり故に古号ゝるとゝ　或云此地い細谷三河守とゝの人の

孝範家集云　むさしの國とゝもとゝの那に入れ初めてゝ住とゝりる

国にをるゝに近ゝあるゝに蔭に茂ゝ鹿の常に住りて夜ふけ初めさもし

ゝ住ゝ住ゝたれとも寂てゝ人の声

ゝるのゝ住ゝを国れしと申まやとゝ

暁のゝれるゝひするあ国のゝのあひゝとゝを古ゝと学らん

返し

国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 124-114
ガラス使用

時雨の岡不動堂

田國雜記

霜の後
あらはれてよりり
時雨をへ
ぬしの岡の
松もうひ
ゝ

道與准后

国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 124-114
ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 124-114
ガラス使用

斬近くまうでゝ宿とゝ侍る夜氏のあひよりもさけ

梅花無盡藏云　木戸公号罷釣翁保和歌之正脉
余在洛而聳聲譽久之矣今也共寓武野之佳
境隅田之上流往還無虚月豈非天之至幸乎昨
賜詠歌三篇可謂暗投也聊奉攀末篇之韵脚云
二十六日（文明十七年乙丑十月二十六日也）

雪月寧非老年伴　一吟聊答數篇韵
隅田春色浪如花　鳥若知都我細問

按ずるに孝範家の事は武蔵国豊嶋郡の郡司入江の郷に住せり其の子孫に武蔵の国の郡司の職を兼ねたりと云ふ又梅花無盡藏の序に罷釣翁と号し共に武蔵の国の住境隅田の上流に寓せりと云ふ今也考へるに三河鳴の地塚その門跡なりと似たり

本戸孝範は従五位下に叙し前三河守と云ふ又罷釣翁と号せり今川了俊の一族なり古田道潅東常縁及び正徹宗祇公敦万里軒と同時世の人なり繰糞大草紙に孝範は冷泉中納言持為卿の門弟なり古双の哥人なりとあり同書に長禄元年関東の乱に付て京都将軍家の舎弟左馬頭政知関東の宜旨を蒙り下向あるとの条下に供奉の人の中に此孝範の名あり

（繰糞大草紙に永徳二年氏満小山義政退治の為発向とある条下に供奉の大将の中に本戸孝範盛満範季と云名を挙く同書に嘉永三年憲基の禁中に参ずる人の中に本戸孝盛満範と云名を挙げたり）

萬里居士寓居地　前に記せし萬里居士本戸孝範と共に隅田川の上流に寓せしと云ふ萬里居士の住せし地は三河鳴のあるべきなり然れども其氏族の人なるべし

萬里居士諱は端九初花洛の萬年寺に入大主和尚に従ひて其法を受く禅機文材ありて名誉四方に揚る應仁の乱を避て江左濃尾の間に寓し後浮屠の業を廃して自然桶居士と号し又一に梅花無盡藏と称し文明の末東武に遊ぶの古田道潅養遇甚厚し潅歿して後濃州に帰し老を投じ曾て天下白二十五巻を著して文明中東遊の詩文集あり梅花無盡藏と号く

塾田明神社

新鳥越にあり祭る所日本武尊一座なり當社は往古鳥越の地にあり正保年中今の所に移せり例祭は隔年六月十日執行也

駿馬塚

同所南側にあり某の別荘の中にあり傳云康平中源義家東征

国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 124-114
ガラス使用

駿馬塚

の時屍を去る五の青海原といふ所に漂屍偶病して死を出だす豊を
傷みて朽骨を擇路の傍に埋めるとて其後里民小祠を営み
建とゝ又近き頃其地のあるゝを歳のやに顕さん
とを欲して塚の側に石碑を建て祠い其塚の東の方に迁ち
飛鳥明神社　小塚原にあり此地の産土神とも立人祀して蓑輪の
天王と称ち列聖い聖護院宮来りて荊石山神翁まと号す
日本紀古語拾遺等に大己貴命の事代主命
祭神大己貴命　素盞嗚命の御子なりとあり
二坐り社傳に往古延暦年中此叡の黒弘師東国化度の砌此地に
至る小小篠の茂りたる一堆の小塚あり　其塚より夜毎に
瑞光を現し白衣を着したる二人の翁判辣生ひたる石の上に降臨あり
と黒弘師に問ふ所に我い素盞嗚命の和魂大己貴命なりと
又一人の翁に問く我い事代主命なりと
仰ぎ清浄の地を撰むと此神祇一社に奉すと
牛頭天王い毎年六月二日より
日九日まで住大橋の南岸に

国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 124-114
ガラス使用

例より器量を設け後所[illegible]
一基流れうる故より是うり後の此日をめつて祭日ととなつり其神輿を石揚し地今牧存と
又張不の[illegible]根を苔より徴化より生しる茅草を用ゆると　端光石　社の右の方小塚の上に
同例[illegible]鳥明神の祭礼毎年九月十五日より執行[illegible]
二神老翁より化し[illegible]の石上より現し[illegible]考へるよりあそこくい上古の荒墓な

豊徳山誓願寺　恵心院と号を花鳥明神の北よりあり浄土宗なり

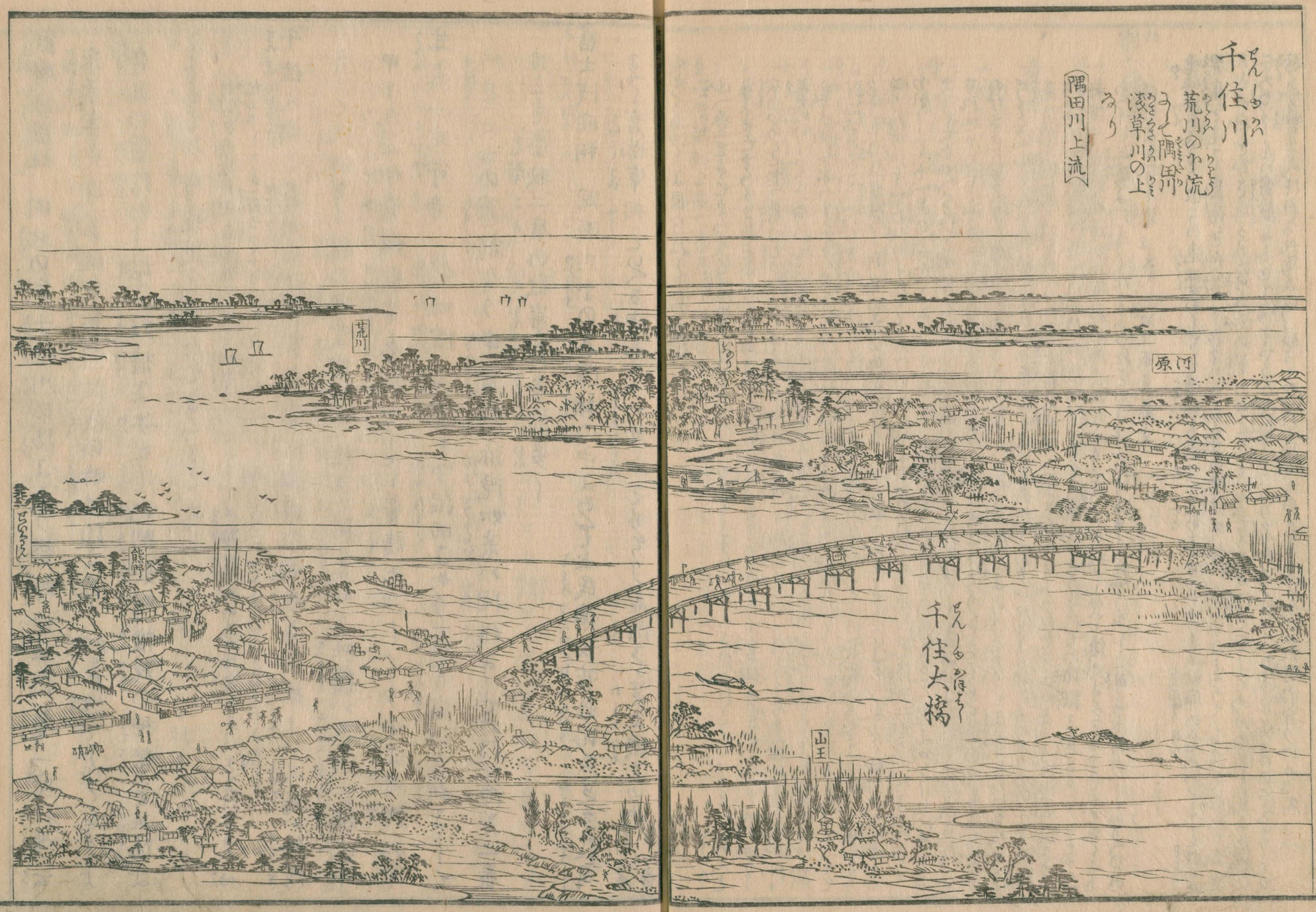
本尊より阿弥陀如来を安置し冥基い恵心僧都の
寺傳曰僧都顯密の二教を究め牧諸宗を渡り遠より弥陀の和願
より帰入し往生要集等を著し大より自化を化ちり　その頃
僧都上足の慶祐法師より請りて曰く念佛の教いちく東国より
を汝行て弘法をへしとのり仍慶祐法師命を受東国より遊化し
此地より来り当寺を建立を　宇佐の恵心院より比しと　中古頽破ちを増上る
十八世了蓮社定誉上人隨彼大和尚中興ちり　当寺を恵心僧都の
し戒の文をいさり学仏の徒の教ましまれりとひ得るまこと記を其文より云く

恵心僧都勅より依て奈内し称讃浄土経を侍講申されれい感感のあちり本尊をとひ
御衣を賜りしい古郷なる母公の方へ御衣と送られし返ゆより是を栄とり悦とちる

されくるのしより恨られし其文より

此へ登せしとちりて後いあけてもられしとも[illegible]道人と
[illegible]のいろをめへ者より[illegible]御経講讀し御布施の[illegible]官位より[illegible]青甲紫甲了
養のひしまとりそとりねたちのは惜さより唯命と限りより樹や石上のとちる草とり木
食より所を求しまとて来をとり落葉をとりて官位階の品さまへ[illegible]
名せの方より祝法し利難の為の御布施さくより出離の御[illegible]輪回のもん[illegible]
[illegible]たちのあひ[illegible]とんけの佛教より[illegible]
[illegible]利しよりさされしとちの[illegible]
[illegible]くとをのくられを面目とありひとちのいの[illegible]
されたる人しより名をちしまて行られたん[illegible]
あけさせたちへり佛法をちしさる賢人さへ首陽山よりとりて王命をいのひ
せりとりやん利髪染衣のれ[illegible]捨れの行よりりんしちひ山とりのひしその行
茶さのこ勅定より法しひ男女雑居の呼いい出さをたちへんをちたちりの御衣いるし
たるれ[illegible]如法如説のひ[illegible]
称讃浄土経講讀のれ布施の御衣此尼とりて[illegible]布施より[illegible]地獄より焦さることを中より
あつりて三途より[illegible]後世らとりるとそこそ[illegible]
法師より[illegible]　以上取意畧文

嗚呼賢[illegible]より故浄の念あつくしと往生
要集を速し自他を利益しなちり事並の僧法師権門勢[illegible]
りらあ利をむさぼるりの此老尼の筆のあとをとりのんや是より悪魔の
ちろるうんい禽獸よもちりとりこんい僧侶りとの人のしとち玉泉のところさしり
後れる物をさへけれる近より返いうめられい後人のをうへくもられ呼ねありける云



国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 124-114
ガラス使用

熊野権現社　同北の方千住川の端よりあり祭神伊弉冊尊一坐社傳云
永禄年中義家朝臣奥州征伐の時此地より河を渡らんとせしに
奇異の霊瑞あり故に鎧櫃を安置し紀州熊野権現の神幣を此地に
とゞめて熊野権現と称せしとぞ
（按に熊野権現鳥明神何れも紀州に孫坐めり又此地に両社あるも呼称あり此社をいとゞ今俗記に詳なるを浮世余談を倣ひと欲しかども詳なるを浮世余談を倣ひと欲しかども）

千住大橋　荒川の流に架せる奥州海道の咽喉なり　橋上の人馬は絡繹
として間断なし　橋の北壹貳町を経て　駅舎あり此橋は其始文禄二年
甲午九月伊奈備前守奉行として架せり普請ありしより今に連綿たり
甘露山延命寺　應味院と号せり　沼田にあり真言宗の古刹にして
行基大士の草創なり本尊阿弥陀如来は国作にして六阿弥陀第二番
目にして春秋二度の彼岸に参詣多し
富士浅間祠　同所川下の方深林の中にあり土民傳云昔此地に足立荘司
なる宮城宰相といへる者あり一女をもうけ名附て足立姫といへり
（六阿弥陀第一番

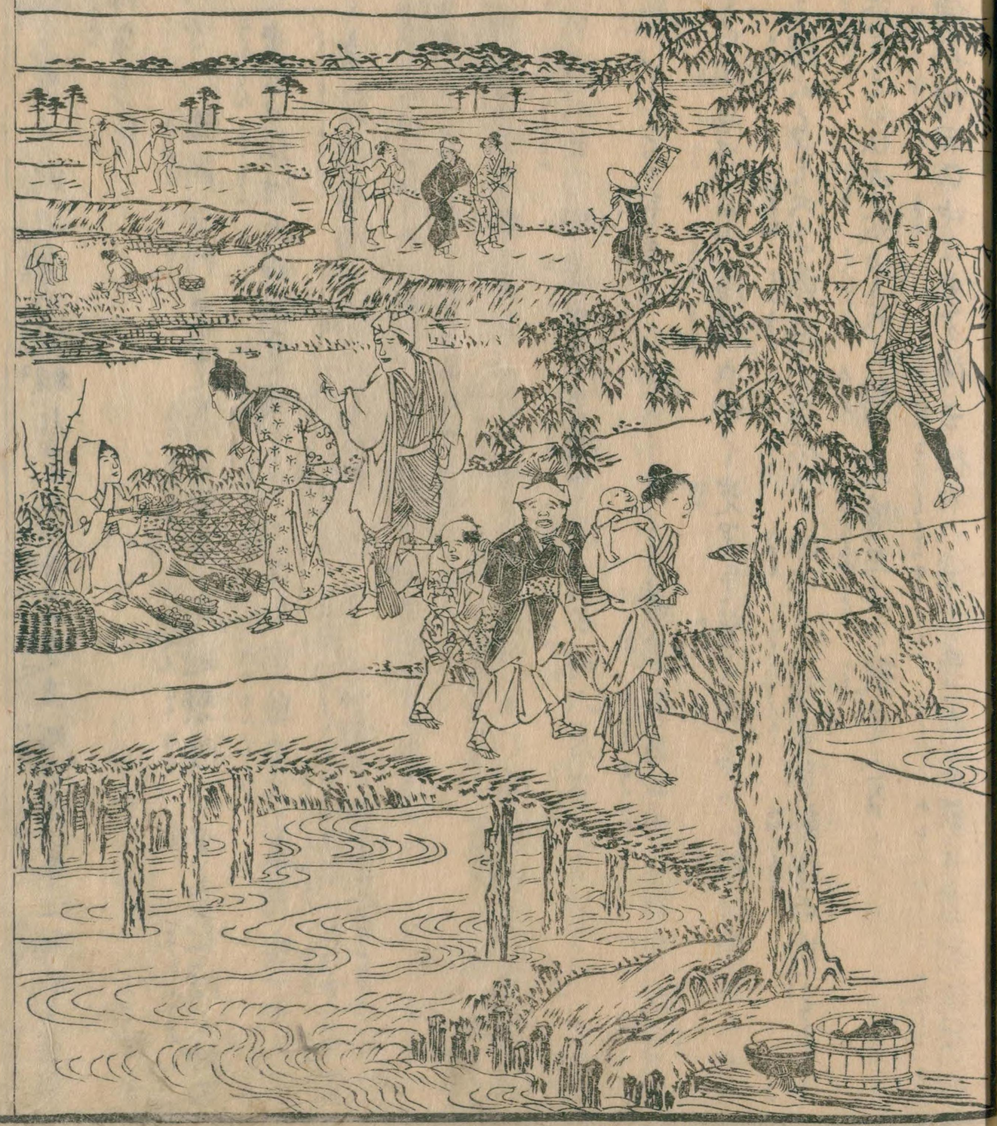
才四番西縁起にあり豊島左衛門尉清光の女とも云ふ二番目縁起にあり沼田荘司の女とも云ふ　父母隣県の豊
三番目五番目にあり六番目縁起にあり足立後二位宰相藤原正成の女とも云ふ）
嶋左衛門尉なる者の娘にめんとて
縁起にあり沼田小捕の娘とあり三番目縁起
舎人の弥陀等の縁起上にあり
外祖父故に是に隨ひて父母強く婚姻を勧めしかども此男を厭
患へて竟に荒川に入て死せり　又沼田川とも云ふ住川の
上流豊島川なり　侍女も又ともに身を投て死
せり仍荘司悲歎に絶へず村人彼女等の行跡のたぐひなきを称し其日
六月朔日のなれいとて其霊を富士浅間と称して一社に奉すといふ
なれども其説未詳
浅間淵　同所の河淵をさしたるいへり足立姫溺死の所なりとい
十二天祠　足立姫の侍女の死骸を収めて十二天と称せり船方材の船守なり
餘木阿弥陀如来　宮城村龍燈山性蓮寺に安置せり往古行基大士六躰の阿
弥陀如来の像を彫刻あり其餘材を以て是に造りたまひし草堂の
中に安置せりしを遥に後明暦の頃正誉龍呑和尚改て一字の梵刹とな

光茶銚

千住の驛より
道の左側にあり
出入の者老茶
屋とも呼べり
むかし此店の茶
銚の光澤の殊
よ勝れたり後
東海道感賞
あつかりしより
此茶銚竟
名物となり
其名さへ
世に
光る
とかや
なりぬ

国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 124-114
ガラス使用

春秋二度の彼岸
まゐ六阿弥陀廻とそ
日かけの長きるよ
催され都ゆの貴賤
老たる若き打群ゝく
朝とく宅居を出ると
いとも行程まとれい
遅くたる妻の日も
長ゆくと秋いとさら
暮ゆくと
ゆりいるへー



国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 124-114
ガラス使用

と此地に住しめしより則此寺の宗祖たる當寺に足立郡の墳墓と称するものあれども詳ならず

五智山總持寺　西新井村にあり真言宗にして遍照院と号す弘法大師の草創にして本尊弘法大師の靈像も同作なり靈驗著く毎月廿一日にて冥帳あり〻〻条詣頗多し　或人云當寺弘法大師の靈像を尚寺に迎ありしが日蓮宗に移り洗目眼薬に用ゐる

打伽井　本堂の左の傍にあり則弘法大師の加持水なり洗目眼薬に用ゐる

八幡宮　六月村にあり別當を宗天寺と号す傳云八幡太郎義家朝臣奥州征伐の時此國の野武士共道を遮る其時六月宗天あられが味方の勢勇〻敷戰ひ共に気色もなかりしより義家朝臣此中に鎌倉八幡宮を祈念ありしに不思議に大陽燒る如く光を背に受れい敵の野武士赤日小むしの故に眼くらみ大に敗北しぬ依て此地に八幡宮を勧請ありしと此故に村を六月と称ひ寺号宗天と称し又幡正山と號ずとあり

白鶴塚　伊奥村田の中にあり傳云往古八幡太郎義家朝臣奥州征伐の時此地に白鶴を建凱歌を唱へしより此名あり近頃近此塚上に小祠あり其傍へ立寄るものあれば崇あり故社荒廃にせしかども其傍に再建せざりしと今塚の上に此辺の田面を白鶴耕地と称す又鬼塚と称するものの立置所あり　鬼首實撿あり　後其首を埋めしと聞く

萬徳山明王院　梅林寺と号す梅田村にあり新義の真言宗にして本尊に地蔵菩薩を安置す寺記云當院冠基志右三郎先生義廣は八幡太郎義家の孫六條判官為義の三男なり　始常陸國伊豆に住し後同國志太村にあり故に志太を以て氏号とす八幡太郎義家物語書に作る　初武州榎戸に一院を創基し祈願所とす　榎戸は今の同所板戸にあり　當院見るに昔義廣義兵を起すの時義廣自立の志ある故に頼朝に隨ひて初て小山小四郎朝政を為に敗られる其後同左馬之助義純の孫義廣三代蟄居して此梅田村に住す　義純は義廣の外右の方を鄰と称す往右義純の邸宅の北にあり　其裔常陸介久廣義純より三代の孫なり　當院の傍に始て天満宮を勧請し鎮守とす又神告に仍姓を梅田と改め小右郎と号す又遠に後永正年間冥東大に乱る同右郎左衛門久義小右郎久廣より十六代の孫同帯刀久光の子なり後左馬之助と号す　是を

国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 124-114
ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 124-114
ガラス使用

厳し丹別嶋村城より移り住し又同國峯山城より移るとかくても遂に敵の為に生害せり長頼子久頼子久友積て峯山に住せり久義の今の地に遷して寺院を再興し真知法印を慶長の頃頼專坊舎利今の地に遷して寺院を再興し真知法印を以て中興開山とせり又寛永二十年の春大樹御放鷹のときこの寺領等を附せらるゝ也

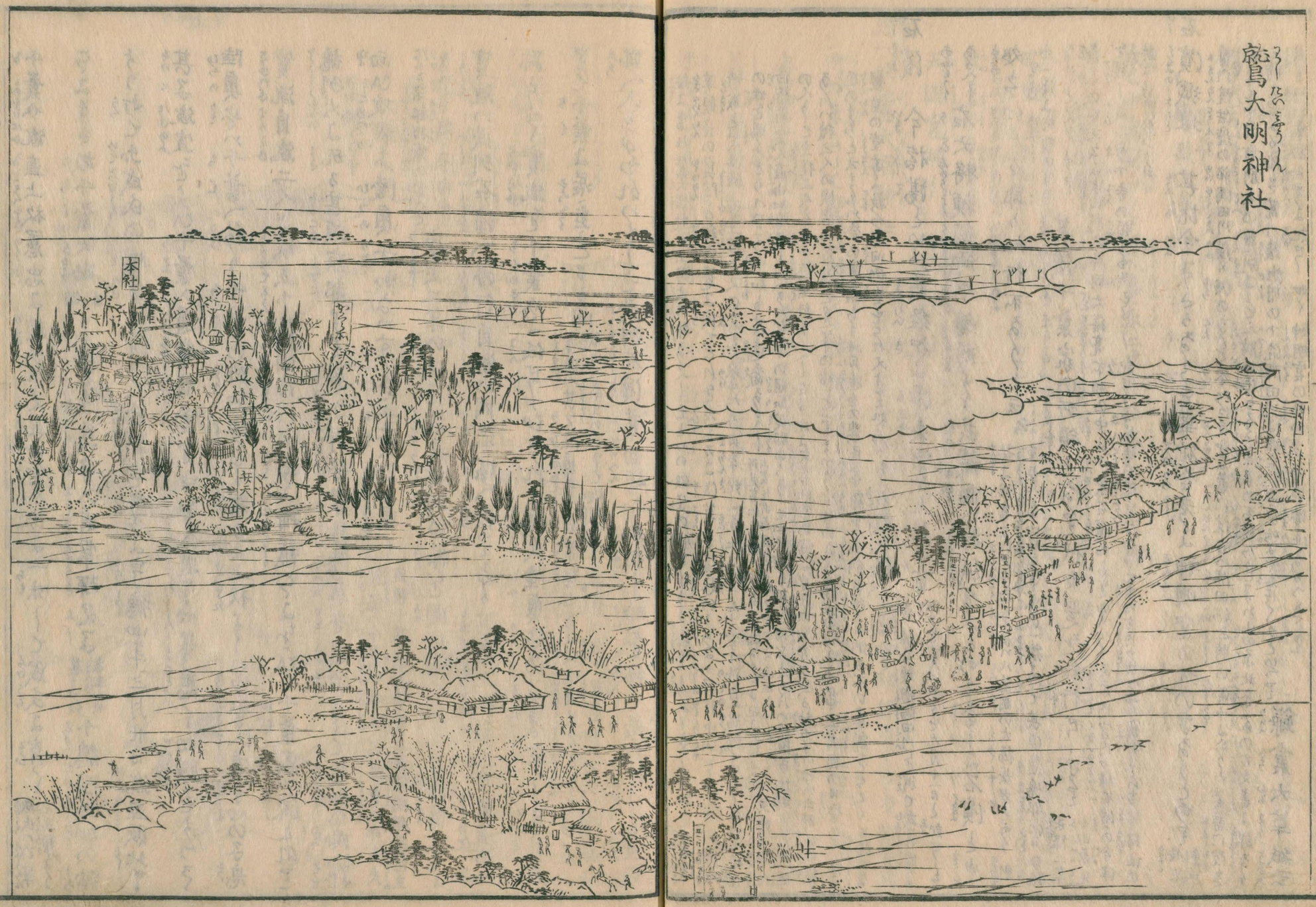
この辺唐院の来由を軍記に記れ寺領等を附せらるゝ也

不動堂本堂右の方にあり本尊不動明王は弘法大師の作にして覺鑁上人根来傳法院草創の頃護摩堂の本尊なりしを天正三年故ありて長洛敗中山清宗寺に移し奉りしを又寛保元年不思議の霊感ありしを仍て猶ほ当寺に安置せりとなり

天満宮祠本尊の後の方小き丘の上にあり古松の枝あり来由は寺記の中に詳なり

正一位鷲大明神社花赤村にあり此地の産土神なり祭神詳ならず本地を釋迦如来なりと鷲は乘ものなり鷲相なり別當は真言宗なりと正覚院と号す毎年十一月酉日或は以て番日とせり縁起同本地釈迦牟尼如来は新羅三郎義光崇敬の霊像なりと天喜の昔奥州安倍貞任叛逆を企るの時本尊の示現ありて其軍勝利あり由を記せるも其説詳ならず

按ずるに当社鷲大明神は土佐大明神なるべし土とはの假字の略なり鷲は社を世俗草観音の奥院と称せり是に因てこれを考ふるに浅草寺縁起のうちに土師臣中知なる人竹成と云へる漁者主従二人の名を呼たり日本紀に垂仁天皇三十二年所見宿禰の名もあり土師臣の姓を賜ふとあれいにしへの中知も其遠裔なるべし所見者称天穂日命十四世の孫なり古事記に天穂日命は又續日本紀に出雲に武新國造土師の連等遠祖なりと土師氏と称せり武新國造は出雲国造の連等遠祖なりと土師氏と称せり武新國造は出雲国造の連等遠祖なりと土師氏と称せり武新國造は出雲国造



国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 124-114
ガラス使用

千葉次郎直上杖憲忠と談ひ又ハ兄弟共と一味して成氏と背く（成氏ハ隋軍を馬鞭とす）
こゝに故千葉大助（満胤）ハ二男陸奥守入道常輝又ハ甚五郎孝胤と云ハ總國馬加の城
より打て出成氏の時方とゆして合戰と竟ぬ享德四年三月廿日胤直敗北し
其ゆ胤宣をうひ千葉入道常瑞舍弟中務入道了心等悉く切腹をとゝ
陸奥守ハ千葉へ移り千葉の跡を繼ぬる為上杖うゐ中務入道了心の子息
實胤自胤二人を取立て總國市川の城ゆ籠離とゝをひて千葉家二流とれを
總別ゆ乱る其頃京都ゆて東下野守常縁陸奥守退治とゝて馬加の城へ発
向ひ攻戰ふ陸奥守ゆゐいすゝて千葉へ引退く（常縁ハ千葉氏常胤の六男東六郎を夫
胤頼十世の孫なり時ゆ美濃國郡上の城主
京都扨軍の命を受て下向せ）康正二年の正月成氏市川の城を圍む同く十九日落城しく
實胤ハ武州石濱へ落行自胤ハ同赤塚へ移ゆ其後上杖家より胤直の一
跡ゆて實胤を千葉次郎任ずゆむされと成氏陸奥守の子孝胤を是貢あ
ゆて千葉ゆ居直ゆる間（孝胤ハ其父陸奥守入道常輝と共ゆ故胤直兄弟を亡し成氏へ奉ゆの入すて故成氏より千葉の跡を賜ゆて）實胤を
城へ入るゆ所れゆとして武州石濱舊西辺を知行し時を待て居たゆし世の

鷲大明神祭

毎年十一月酉の日ゆ
修ゆす世ゆるの
すちゆとゆて此日
近々の農民家鶏を
殺ゆて祭終るの後
悉く淺草寺觀音
の堂前ゆ殺ゆて
崔間倒ゆて

中を述懐し濃州に宗居を依て上杉家より實胤の跡を兄の自胤に賜り千葉改
め任を是を武州の千葉と号を　以上藤倉大草紙の意を採る

南朝紀傳云　丙子康正二年三月千葉乃家も成氏と上杉と相論によつて
二つに分れ惟胤と園城寺の某武州に趣く　云云

梅　花無盡藏文明丙午隅田河詩註云　隅田在武藏
下總両國之間路傍小塚有柳道灌公爲攻下總之
千葉構長橋三條　云云

同　書　便面題詩註云　八景或雪讃献千葉蓋上總
下總千葉所管也今寓武州者與上下總之千葉矛
看一門分爲二灌公故在武者

雪月碧湖煙雨後　漁歌鐘色送飛鴻
片帆千里賣花市　上下　云云　總飯君握中

蓋　説寓武之千葉惟種也

又案東古戦録小田原實記等の書によれば千葉大助満胤の虎は北總馬加の城主陸奥守康胤異母弟惟胤
と家督をあらそひ康胤打勝て總領を相続す依て宿老の円城寺左馬助惟胤をいさのひ江戸城
によりて太田道灌に庇陰を頼れい道灌これを高家に上杉朝臣利根に上杉朝臣に上杉朝臣に依て宿老の円城寺左馬助惟胤をいさのひ江戸城
に上杉朝臣に上杉朝臣に上杉朝臣

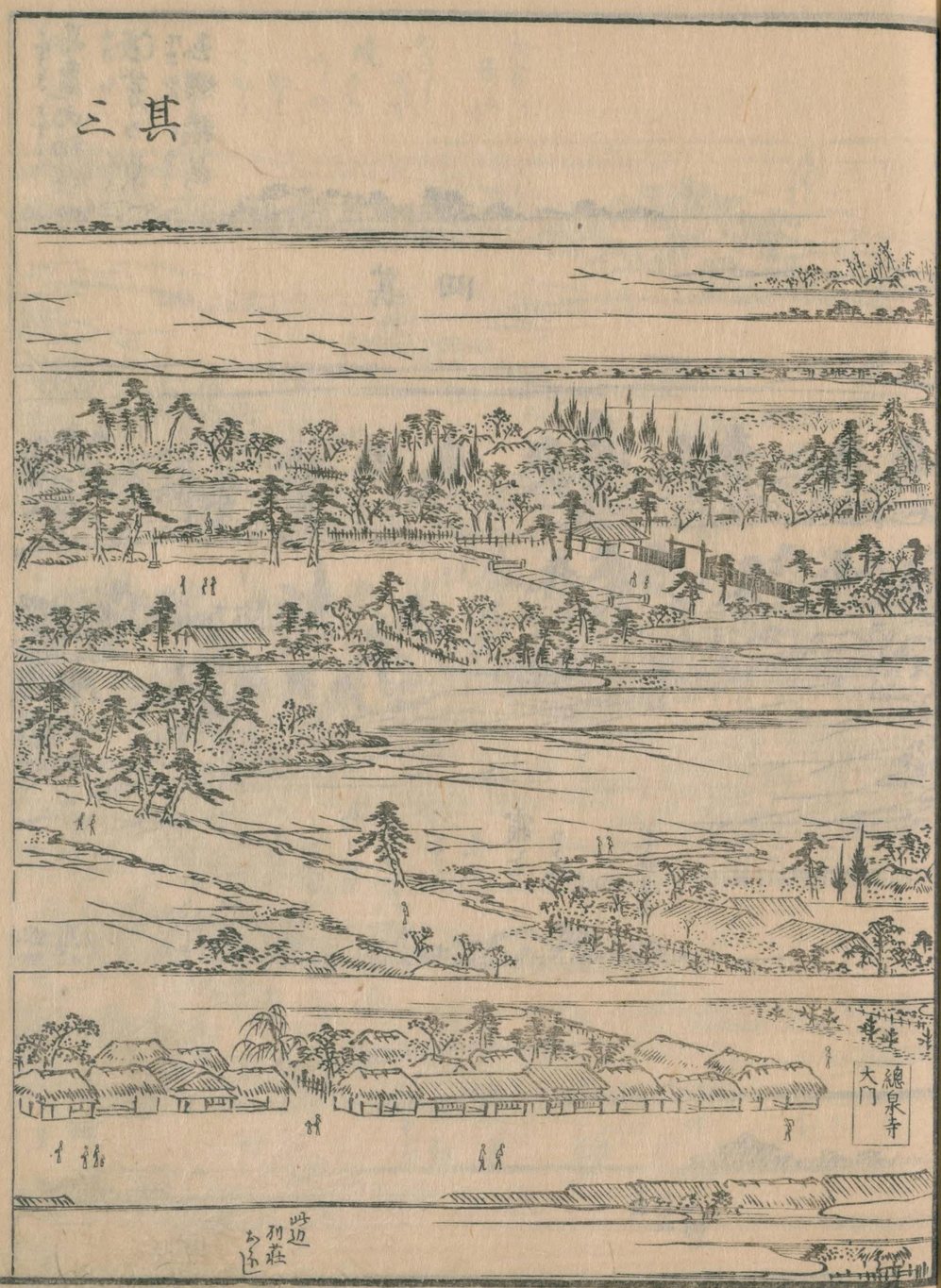
石濱神明宮
隅田川西岸
本社
天神

何の
芭蕉
天王
手置帆負命
彦狭知命
稲荷
茶

其二

うき舟の
流るゝよ
川恩
河の
秋や
水の
みなもみ
道真淮后

国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 124-114
ガラス使用



国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 124-114
ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 124-114
ガラス使用

法源寺
鏡ヶ池

其五

佐殿神社のあるよりして仰られ太井隅田を打越て板橋に着給ふとあり　隅田河右海より流れ

海村ありしより義経記の文義なども考へ

夫木抄

隅田河むかしいまをかぎりとて今とそこの身を浮橋のある世なりけれ　光俊

其詞書によりて此年の康元元年鹿島社まうでとて角田川の渡をこれに被なりて今の浮橋をわたりたりけれとあり又

梅花無盡藏詩註云　隅田在武藏下總兩國之間路傍小塚有柳道灌公爲攻下總千葉搆長橋三条云云

按に深平盛衰記を引光俊鹿島記行等の書に載るものは仮初にまうでる所の橋なるへし深平盛衰記をはじめ太平記等其他の書にも橋場の名をもて橋場の号を攻る頃より發るなり南向亭云く隅田川の渡場より一町ばかり上に舟代のあるなりと云々されと其橋のうれの項のみなとと云々佐と考ふるに今のうら場より一町ばかり上神明宮の大門の通り其舊跡なるへきをまた里老まくいふ此地法源寺大門の通りをもひ今のうら場より南の方鑑船所のあるあたりとしるしたる所いと和漢の橋を

朝日神明宮　橋場にあるを石濱神社ともいふ　或人の說に此地に神明宮あるを或傳に橋場神社とも号く祭神伊勢に同し内外両皇太神宮なれ共まつる社傳に云

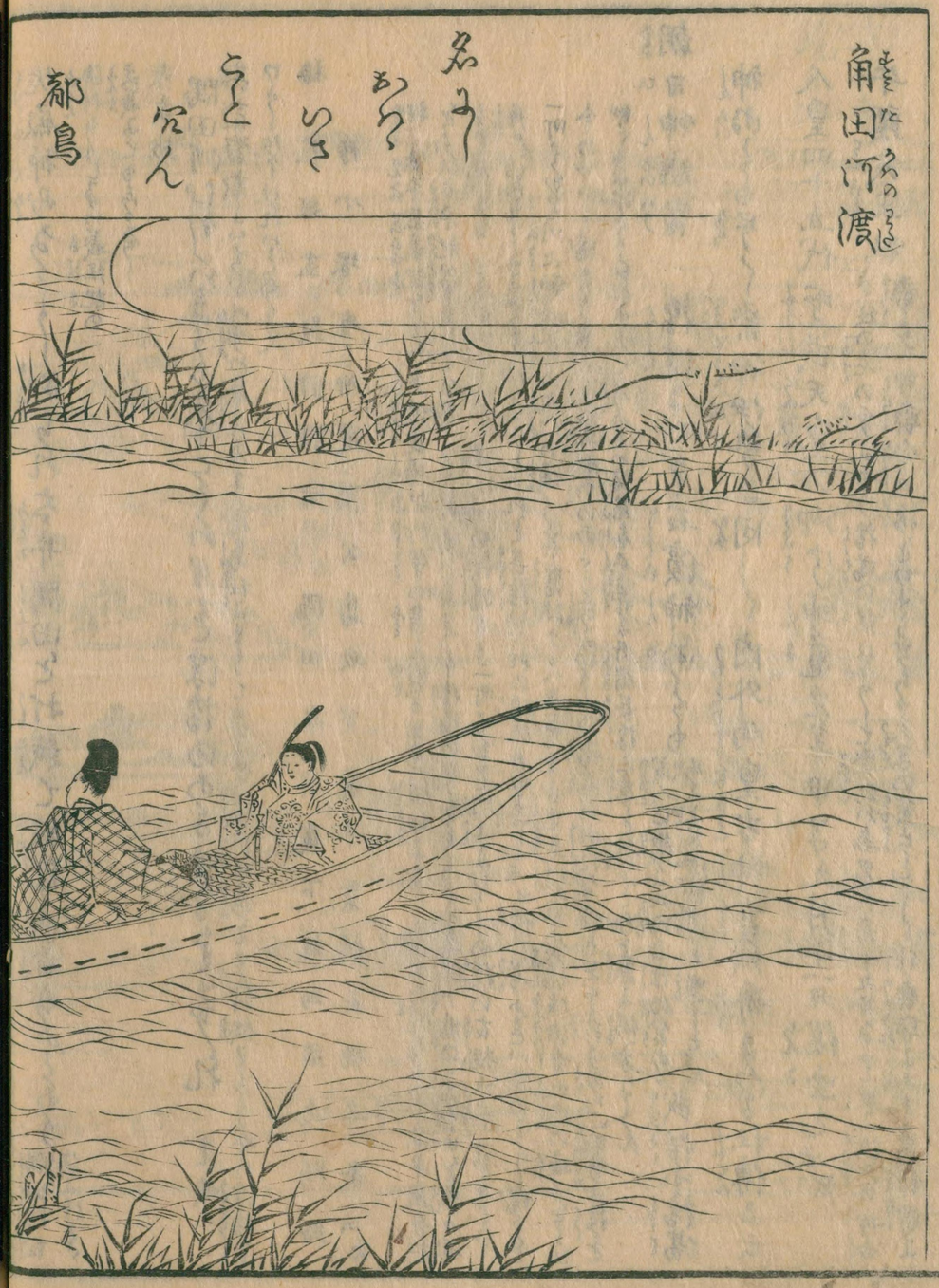
人皇四十五代聖武天皇の御宇神亀元年甲子九月十一日鎮坐と云云

牛頭天王社　本社の左の方にあり橋場の法寺すなわち氏子の輩ら毎年祭礼い毎年六月十五日なり世に汲入の押合祭とて神輿今戸橋をわたりて氏子の輩ら神輿卑に出る其神輿に

隅田川渡

名ゆ
あるて
いさ
らと
ぬん

都鳥



東

ひと
ありや
うら
やと

在原業平

国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 124-114
ガラス使用

正平七年
隅田河合戦之景

国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 124-114　ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 124-114
ガラス使用

[illegible]

小祭宮ちんゆうりめさき輩い當社よ詣て榜を受たることいつを殊てゆ苔

宇都宮等の崇尊信〜神田等を寄附を此地昔い奥州街道すして文治

の頃い鎌倉右大将家も當社よ參詣あるをしとなるを境内樹木多く欝茂として

上久たを毎年六月晦日名鉄榜を執行を祭禮い九月十六日なり此日社地ゆをひて生姜を賣く故て

俗間是を生姜祭と唱へり

真先稲荷明神社　同所隅田河の流よ臨む祭神倉稲魂一坐なり社傳云

久代千葉次郎兼胤家よ霊殊を傳へ此霊殊の加護よや数度の戰場て

先登の誉ありて同守流の代よ至り此石濱の味主たるを味内の殖守

なりて彼宝殊をもて稲荷よ勸請し其先稲荷明神と号とと云往年本社

社の彩繪神木の樓よ[illegible]られて[illegible]の代[illegible]

依て今い神殿よ収め有信の崇[illegible]毎月午日此神宝の霊殊を[illegible]

本社の額よ真崎稲荷大明神とあるい神祇伯ト部朝臣兼雄公の筆なり

神木模　本社の前よ[illegible]を[illegible]の中間の虚より霊泉湧出と

病あるもの服飲[illegible]を得るといへと

此社前い名[illegible]あり隅田河の流容[illegible]して晝夜を捨て食店酒肆の軒端

を河面小艇むて四時の風光を貯へ殊更其の月桂を流よ浴て炎暑を

洒紀秋の夜を中流よ掉さて月を掬て雲の夕妖艶たる須田堤の花盛よ

至皚たる白鬚木母寺の雪の朝孤眺なも共よ奇〜として實よ拯宴の勝

地なり

思川　稲荷の茅よりて橋場の渡場へ行道を横きれる汐入の小溝をの治兼

四年唐子鎌倉將軍頼朝公此地を過たまひし河あるを弱を洗いむ故よ

駒洗川とも号へる也里民云傳へ

按よ東鑑よ治兼四年庚子十月廿七日依竹冠者秀義追討のみよ頼朝[illegible]進發あり[illegible]同年十月

四日常陸國府よ着あり[illegible]其次の[illegible]

恭衡追討の首途よ復朝隅田河を[illegible]往古の奥州海道なれいさも

あるへしとなり

田園雑記　舟りひ川よいそりとよめる

うき旅の道ふかうる〜思ひ川渡乃神やあのうるめみ　道真准后

隅田河渡　あづま隅田河のわたりかいなるとゝ云云

搭場よりて須田堤のあなたへの古代渡りを今い搭場の渡と

唱へ　元禄年板の江戸鹿子と云る草紙よりむかしの渡い今のところより北へ川上なりと不の名きく物語もるるりとあるをむかしい須田の渡とものひあるるや夫木抄よ経兼の詠あるを

古今集　むさしの國とちりあさの里とのあるかるすゝ行のかるとよりてかるゝ級のゆくちひしう舟ゆえられいたるゝ河のわたりよりあるをめて思ひやれいあきりるゝ年をも来りあるれとありひいてあるゝあをるよりてゝきるや舟よのれ目も暮ねとのひられい舟ふのりて

りてらひとをるよるゝ物をひしくて都よりの人なくしもあるとさるりよ向き島のちと

あるとあるに河のわたりよあそひけて京のかえ人見ちらをりてゝまよ

思をを何をるそと向られい是をむ都島とのひりをきてゝよめる

名所　舟くいさゆとをむ都多る、氣思の人ををりやれしと

音妻の道の記　角田河ちりときゝて見るゆ〜今も船よ

のれとよいこのりて守のををるやあらん

とれそをのあつまちをゝ思ひうすゝ行糸の渡りけふ　長嘯

とりてたをそれとをのまむすをたりいれれる島のあらぬやもをを　同

わををる道よあさくさの観音をを岡ゆをりそをるを

佛ゆをりそを云云

夫木抄　久霧小須田のわたりい見え孤をも舟人ををの多ゆ

石濱古戦場　搭場の北をを石濱とへるよ似をり　経兼

新安手簡よ向石先生石濱の教あををりを暑を

古平記云正平七年壬辰閏二月　故新田義貞の次男左兵

衛佐義興二男少将義宗後父に才左衛門義治義兵を紀し其勢十萬

余騎よて武蔵國へ打入ををれよ依て将軍尊氏も鎌倉を進發し

敵を道よ待て戦を決ちむと同十六日僅よ五百余騎よて武蔵國へ發

向あを追を小沌集る勢をを〜八萬余騎をを〜同廿日武蔵守の

小手指原へ打て出新田足利の両勢二十萬騎入乱て大よ戦ひ寄をを足利方

の先陣急よ敗をを引退をれい後陣をむの神ちを方よ敗走を義宗

自諸軍を率て大よ呼て云天下の為をい朝敵をり系をを父の讐をり

此戦よあをを尊氏の首ををををむい何の時をを期をへきをを呂二引両の

大旗の引よ分て小手差原より石濱近坂東道既よ四十六里を虎時ら間

小追分をを此時搭軍い石濱を打渡虎口を通る　天正年中隅田川とあり　猫搭軍の兵

士殘を止て先途を支る間よ日も既よ酉のかたよるとて河の渕瀬も見え
わらさんい義家を續てわさをもあらんと又後より はく味方もあられ母と
かくぬのあれと牙をかむて本陣へ引歸さはくとあり 以上古本記の意を採る
砂尾不動院 指場寺と号と渡坊のおし南の方道よりを右よあり天台宗
ゆえ浅草寺よ属ち 往古の法相宗なりしを伝教大師の代長寛癸未歳よりて宗風を改めしと
宝亀四年癸丑良辨僧都
の上足寂昇上人当寺を定基し本尊よ不動明王の像を安ま
縁起曰本尊不動明王い良辨僧都相別大山寺よあらし頃彫刻あり
三鮮の一ゆて彼寺の本尊と同木同作なり僧都一時上足寂昇師小告
て云く三鮮のうち一鮮い此山よとめ一鮮ハ持念を殘る不の一鮮
い汝よ附属をへ 付方よそも有縁の地よ安をへとなり仍て僧都化寂
の後 宝亀四年歳八十三ゆて寂ち 寂昇上人上總の方へ赴く道の次適此地よ至り霊告を
得て有縁の地なるゆを志をゆよ安し則村老僧人よ問へ草堂
を營て砂尾不動尊と号云 砂尾薬師如来寺内よあり本尊ゆ

恵心僧都の作なり 南向亭茶話よ云く或説よ此砂尾往古砂尾殿と云人ありて
天台宗なり砂尾山不動院と云と云さんと当寺侵記よ彼殿を夫のゆを載せまし通灌と戦ふを
諸書よえあらしと雖考へへ

亀山總泉寺 曹洞流の禅林なりて江戸三箇寺の一員たり

宗俊和尚と号と当寺い千葉家の番花院なり
のゆを云
なるへし

千葉氏墓 境内卵塔のうちよあり長三尺巾の青石よ梵字のみを鐫めて年号法名ハ
を註せし当寺よ大檀那よ紫砂宇常徹の霊牌と称とるりのあり總泉寺殿長山
昌徹大居士とあり寺僧云く守徹い弘治二年丁巳十月八日卒去とされと守徹卒去の時亡とあり
乃ひあるよ似くるり又江戸鹿ゆよ常徹の墓碑ハい春浄院殿貞公居士因よ苔ゆ貞徹の
墓碑ハい貞公自風流とあるし 記ちとも
今不至を志くに牌位日者ハのるまき

宇津宮弥三郎入道墓

十一月廿日其一ハ弘治二年丁未二月七日とあり
按よ当寺よ氏ハ宇津宮弥三郎い頼綱入道貫信坊なるへし又の号を蓮生と唱へ
添空上人の法を承て後善恵上人よ就て出家ち三ゆ貞を師
の石塔の傍よ似るし 西山上人の伝よ見えしり其の況い則京師西山三結寺の東の脇なり依て老僧
徳治元年己未十月京師よ寂し遺言よりて貞を師
徳治ハ元年己未十月京師よ寂し遺言よりて貞を師
よ当寺よあり不の号のハむし其ちく換ゆと此辺よありて安し建ち不の墓碑なるんをしさんと正安
余年ゆ最不審ゆ

抑當寺い正法眼藏の妙理を志めし實相無相の心印をひらく向上の一路

よく着相實有の草を拂ひ言ヤの一喝まこと異樂狆鮮の塵を掃と云案の庶の前より一千七百の則を重て以仏傳仏を付く坐禪の衾のりとまこと朝之暮四の眄を浮く文字言句の話頭を離たる

淺茅原　總泉寺大門のうしろにあり

田園雑記　淺茅ヶ原とゝゝるあるよ

人めさへかれて淋しかれ夕まくれ淺茅ヶ原の霜をわけつゝ　道真准后

妙亀塚

日本よりあり梅若丸の母又妙亀尼の墳墓なりとゝゝ伝ふるゝ小堂ありとゝゝ草堂を建つゝ妙亀大明神しく称ゝ

古墳一基

妙亀堂のうしろあり青き一片の石にて長二尺あまり碑面蓮花の上円相の中に法門と云号をちらしてゝゝ弘安十一年正月廿二日と彫刻ありよ

巻第四十二に云ゝ加禄三年六月廿二日此年三月安貞と改元あり山門の要徒奏軍を発て大谷深空の墳墓を破却せんとて其夜法蓮坊貫西坊潛よ上人の遺を奪出し蓮生坊信生坊法力坊東氏の抵後立位下道遍坊法名七郎西佛坊頭官兵衛尉の家出家の身なりとゝゝ法衣よ杖を帯し奴婢を伴ひ廣隆寺の来廷坊四空坊竹ようとを記せり按ずるに法名いま第六帝古夫徹頼ゝ常徹のゝゝ徹頼ハ常徹の府六帝徹通の弟なりとの古墳なるゝゝ

ゝの法坊の墓碑なりゝゝ

鏡ヶ池　同所西南の方ふあり傳ゝ云妙亀尼梅若丸の跡を尋ゝ京よりこゝ

さ海ゝひ来をしゝ梅若丸身まうをを穿ゝ此池よ身を投てむれしゝ

あるとぬとを

傍ふ鏡池庵と号る小菴あり

辨財天を女と是も妙亀尼をまつる不のりとゝゝ

袈裟懸松

池の傍よあり一名を袈裟懸松しるものゝ妙亀尼ゝの松の枝よ衣をかけ亜ゝ

東野先生之墓

同所橋場の通り福寿院とゝゝる禪林よあり先生ハ儒家ゝ諱ハ煇圖東壁と字仁斎ゝと称ゝ安藤ハ養氣の姓ゝと幸性ハ号須氏なり徂徠先生ゝ就ゝ大ゝ

古文を学ゝ世ゝ復古の学を唱ゝ墓碑の銘ゝ

南郭服夫子述る所なり其文ゝ

采女塚

同所寛文の頃吉原町より移ゝとゝゝる拝ゝ

来ゝ池中ゝ身をなげてむれしゝなりぬ夜明てのちあるゝの人ゝ墓ゝ

小小袖をなげ一首の哀をそゝなり

名をそれとたゝとゝもたれ猿澤のあとをかみる池よ月のわ

歸命山法源寺　俗量壽院と号を浄業の古刹ゝて徳泉寺の南ゝ隣る

宝亀元年庚戌の春智海法印始て此地ゝ大日堂を建立と其後延暦三年甲子の秋村里の人民力を合て一宇の梵刹ゝ砂尾石濱の道場と号ゝ

尼出大僧智海法印ハ天ハ元年丙戌三月十四日化寂二世權大僧都海法印ハ天長七年庚戌四月十五日帰寂ゝ三世恵海法印ハ承衡元年甲戌四月十九日化寂ゝ

隆性院從二位藤原朝臣四辻有隆卿墓碑

崇手境内よあり再校江戸名所ゝ延暦八乙巳の年ゝ漸ゝ四辻家の姓名三人の官名實名ハ有ゝ

其来由もまゝ詳ゝ云寺伝もとゝ

国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 124-114　ガラス使用

按ずるに譜牒記に西園寺大政大臣以経公の四男四辻権大納言正二位實蔭卿十五世の孫権大納言正二位公理
延宝五年己巳六月廿七日薨去六十八とあり實蔭卿の祖父より延宝の間の人なり四辻家の祖父より延宝の時世
大なるかりしかるに後三位に正二位有理卿に延宝八年に五年己巳の誤りなるべきを薨去の日日
附合ぢりされと文字約鉄して讀へあり〜と云ふ後の考なるべし
齋藤別當實盛墓　日野よりあり石塔に僧形念阿を持ちたる像と雕る裏に篠原院前左金吾五位
後五位德山覚道真盛の大居士寿永二癸卯年五月七日と刻しまた當寺七世の住
俱法誉上人え奉和尚え禄七年甲戌五月廿一日夜霊夢を感じ孫吾庫助信利是を建立せるよしを誌せり
法誉上人は實盛の氏族なるよし南向亭茶話にえたり法名は其頃新に命じたる実盛の寿永二年五月
賀州篠原より
戒名と

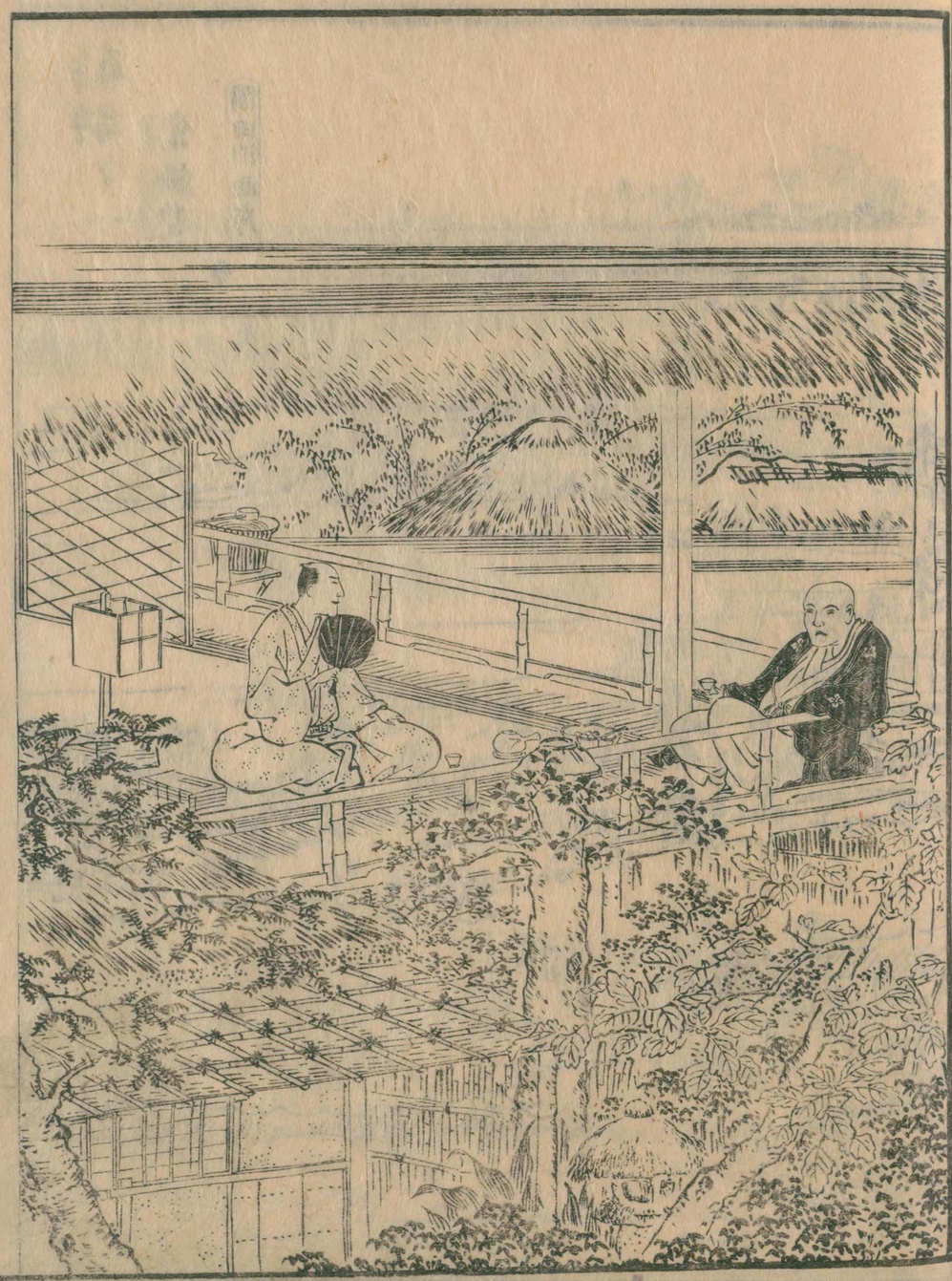
鎌倉権大夫景道石塔　日野よりあり神面向町弥陀佛造樂延久二庚戌年十月廿二日とあり五輪の石塔
なるべし造立せしなり景道は鎮守府将軍良兼四代の孫九郎尉致経の二男村岡小五郎忠通の子なり
其余當寺歴代住侶の石塔まさに寿永正嘉寿永康元文永弘安正安嘉元正和文慶正慶文正応の年
号を刻せり石塔の中より発せり
されどいまだ故あり近年散失せしなり

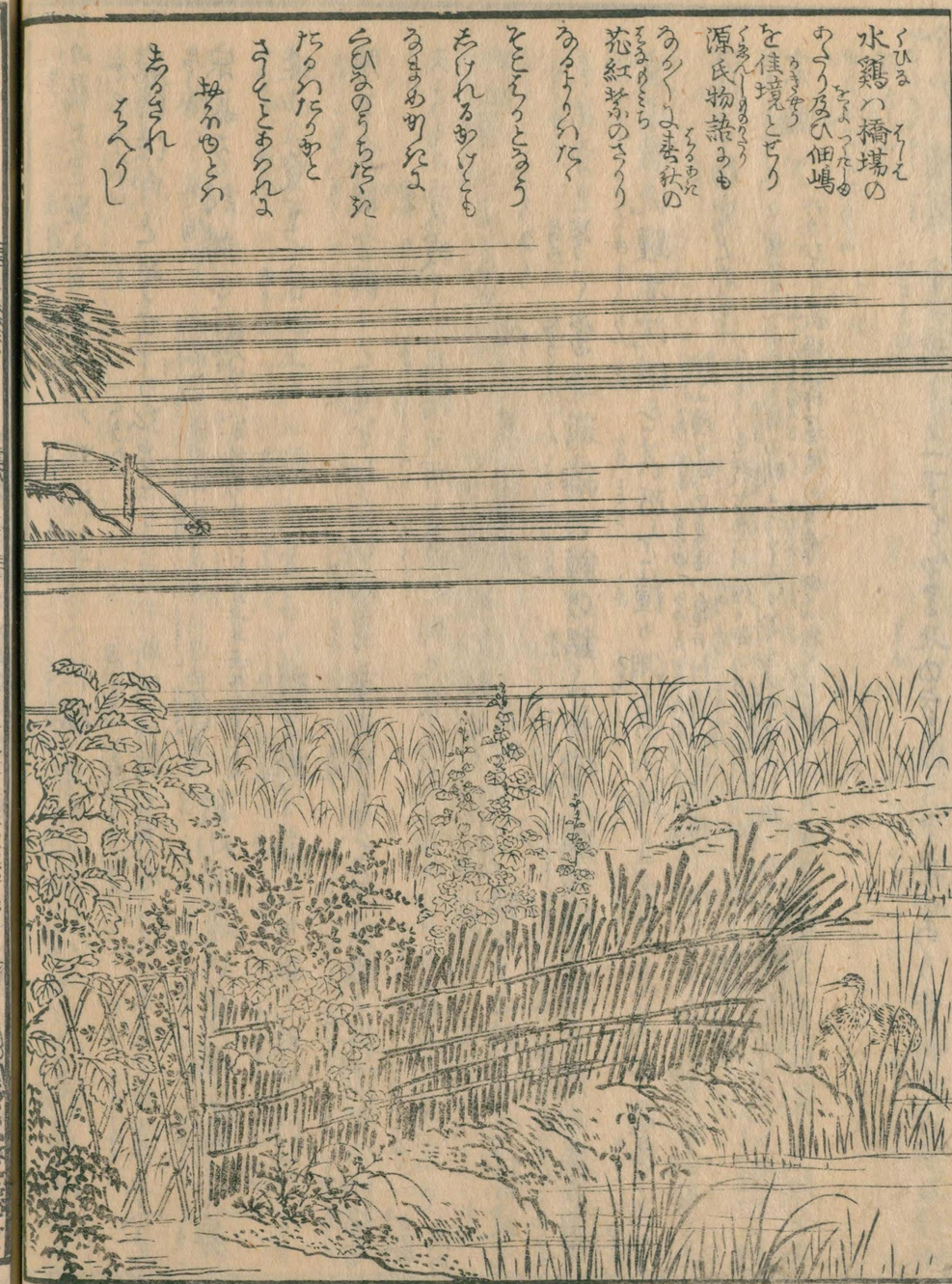
當寺は天台宗の古跡なりて保元年間中興して保元寺と号せり遥の後
大いに荒廢せり明蓮社聰誉上人西仰和尚の時より台宗を改めて浄家
小溝と其時より文字なり法源なり〜たり寺院再興あり〜と云
を藏せり今世に伝へたる文字保元寺と作る又境内に弥陀堂至観音一光三尊の像を刻し一名に具
色林印の五字をちりばめたる裏に慶平二年武列保元寺とある古墳あり疑とせり
深榮山長昌寺　法源寺の南に隣る當寺は御府内日蓮宗の古跡なり延山

小屬なり冠山日寂上人は始浅草寺の住職なり〜上古は天台の法流を汲み
寂海法印と号せり弘安二年巳卯歳所に於て日蓮上人の第子日常上人と
宗義を討論せ　日常は常陸国中山の法華経寺の尾山なり　或いは宗論あり弘安五年壬午なりとそ　後小日蓮の宗風に帰し一身
延山に登りて宗祖上人に謁し第子の禮を執り名を日寂と改め後浅草に
帰り金龍を辞して庵をむすび妙昌寺と号せり　てらは隱る浅所の両僧も
又とも小受戒して日増日可と改む同九年丙戌十月一日日寂上人帰寂せ　日寂上人の
墳墓境内にあり中古造立せしところなり　依て其後日増　牟賞房　日可　汀内房　精舎を搭場の地に建て
長昌寺と号く當寺新鑄の鐘の銘に其地え隅田川に接せ偶水難に罹
堂塔漂流鐘亦沈没せ其所を撞ヶ淵と云ふ孫えに亨えに年辛酉寺を今
の地に移せりとあり　按ずるに撞ヶ淵の来由は亀戸村普門院の境内なるべし
宗論芝　牟堂のまへにあり扇の形に作りたる芝なり　一の標石を建
世に示さんなり　寂海法印当寺の日常師に従て宗教を叩き竟に日蓮大士の弘法に帰し一説に永
残せりとい

今戸八幡宮　今戸橋より一丁くらいを北の方道に左にあり祭神山城国石清水

国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 124-114　ガラス使用





くひな
水鶏ハ橋場の
めぐり及び佃嶋
を佳境とぜり
源氏物語ゑも
のゝくゝよ春秋の
花紅葉のさゝり
あるよりハなく
そこちゝとゐう
たけれるあけても
ゐまめ明なる
ひのちちたくた
たるハたりあと
さてとあられよ
ゆかりもとゝ
ちるされ
そんゝし

国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 124-114
ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 124-114
ガラス使用

小岡〜別當八天台宗にて松林院と号し祭禮は毎年八月十五日より——

放生會を後行ひ

社記曰源頼義朝臣義家父と共に勅を奉じ奥州安倍貞任宗任を誅戮し仍て康平六年癸卯八月其祈願として鎌倉由比郷をよび此今戸の地に至て石清水八幡宮を勧請ありしが本内宮内少輔呼領て石濱今津と云地名を如へたり按に津戸は通音なれば今戸社記に今津と作る小岡原北条家の分限帳にも今戸とあり其後奥州武衡宗衡兄弟叛逆の時も義家朝臣鎌倉鶴岡をよび當社八幡宮等に祈願あて賊徒を亡し勝利あり故永保元年辛酉両社の復造を加へられ行基彫造の弥陀を以て本地佛とし又同作の薬師をよび慈覚の作の観音等の像をも安置あり其後文治五年右大將頼朝公奥州の泰衡追討として進発の時も此御神に祈誓あり勝利を得ゆえ建久元年庚戌下河辺庄司行平を奉行として宮社を重建あり然に寛永十三年丙子台命を奉じ舟越伊豫守八木但馬守等是に司

今戸焼

此辺甎者陶器通ずして是を産業とする家多し世よ今戸焼と称す

元禄二年七月三日隅田河ながれ出をとり上る ほうれい

そのねもの
露や
いとすむ
や尾
松風

霊亀山慶養寺

同く南の方今戸橋の北の結よりあり曹洞流の禅刹なり

冠山を明山良察和尚とり

黄門え鳥越西福寺の隣ふり後本堂なり

総門の額霊亀山

の三字は頤斎の筆れ是辨財天社境内よりあり本尊は弘法大師唐より携来の

霊像なりとのべり

当寺え鳥越の河よりし時伊丹左京弁川家女とゝる両人の仕出故あり元封果したるあと

真土山

当寺仏物の藻屑物語とゝる草紙に詳なり

今戸橋の南の結よりまゝ待乳山作る或信土山作る万葉集に示打

沙門契沖の示打山と書てまちやまとよむ

とゝ

万葉集の文はまれいなりと云云

示打山暮越行而廬前乃角太河原爾獨可毛将宿　弁基

建保名所百首

今宵まゝ誰宿めらん庵磯の隅田河原の秋の月哉　須徳院

月影のさゝや菴磯すゝ河越てまちや山のかひよりゝ　家隆

新千載

誰よりもまちやまとゝむまちや山夕越行いあの人もれ　定實

秋風抄

ほゝたち山夕越行い風寒ゝすゝたゝ河原に鳥れくゝり　季廣

回國雑記　道ゝゝ名所とも多ゝ有ゝ

まちや山とゝ所ゝ

いゝ家ゝのもゝゝ東路のまちの山ふるのいまぬらん　道與准后

山谷堀

俗よ曙とろろも
いろこと

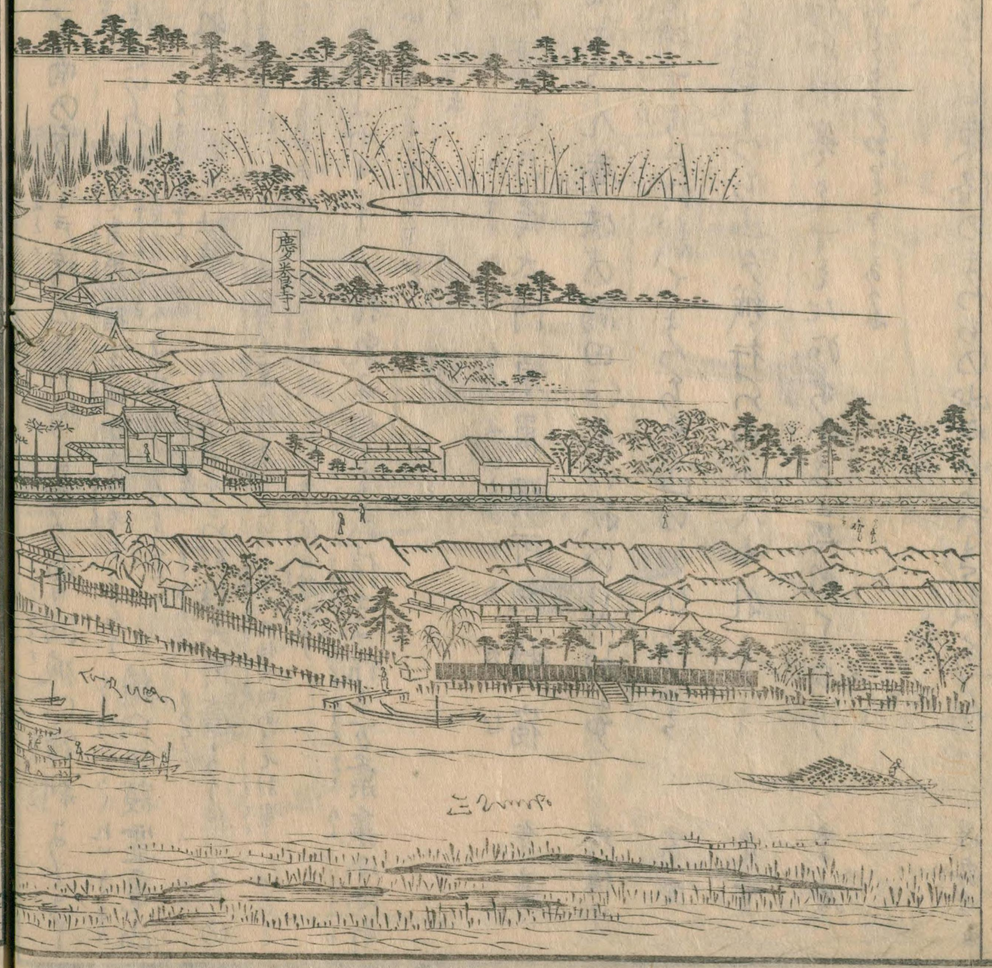
今戸橋

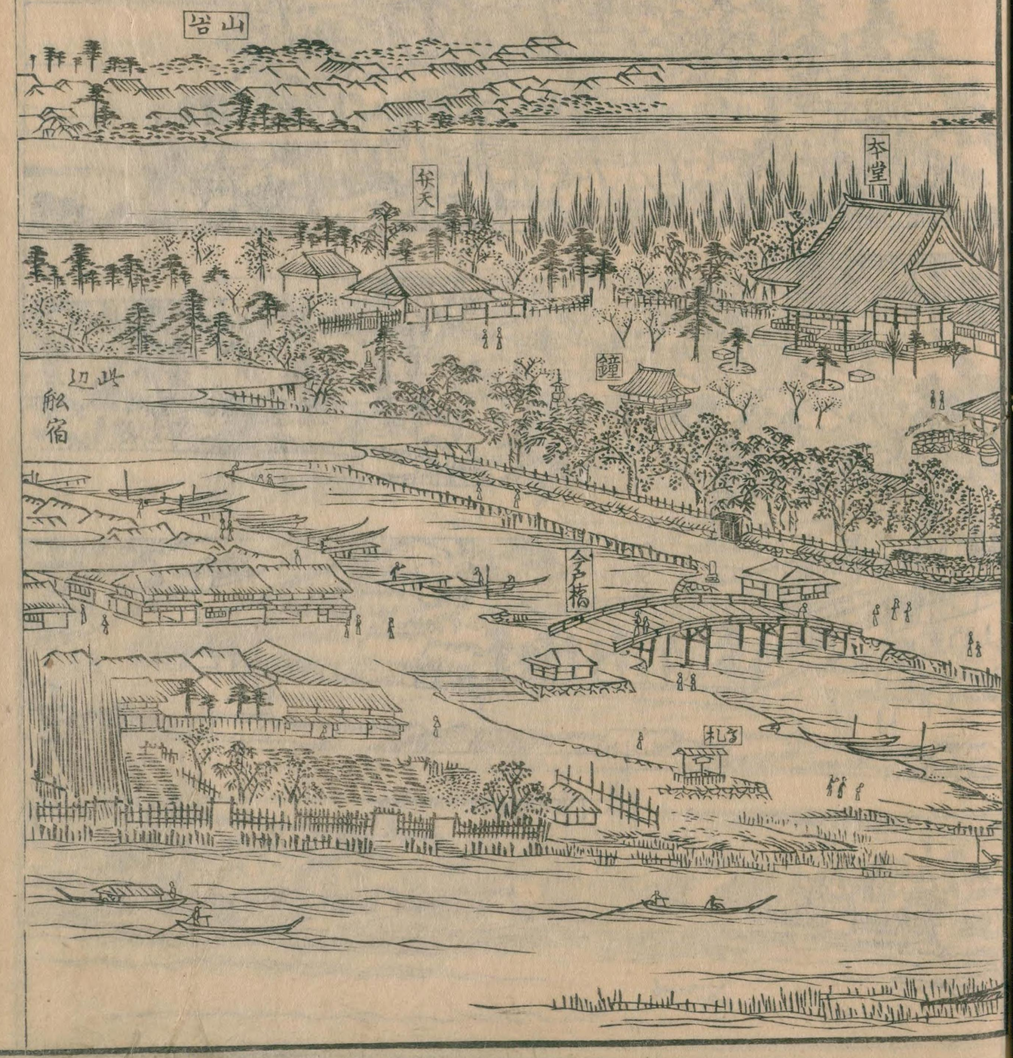
慶養寺

隅田川西岸

待乳ろうんと。梢
のりとむ今戸橋。
土手の相傘。片身
めくりの夕時雨。
君をわりへ。おりる
しりしの細布

右英一蟹戯作





国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 124-114
ガラス使用

真土山聖天宮

隅田川西岸

国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 124-114
ガラス使用

時雨とも降るかの小野のみちぬまつち山落葉を時とこのしたぬく　日

戸田茶光入道茂睡聖天の宮のかたらふ
碑を建たり其碑面に

あらんとて又紙に行人もえよまつちの山のとしとしとのと　茂睡

按に井徒抄八雲御抄等の書に万葉集に載たる赤基法師の
宗祇の名不見角抄等に古和紀行の國境とあり藻汐草に
信土山角田川のりて廬崎より駿河に隅田川庵崎
ともありて全くそれとされとしたの地に
るりと云まつ按に西山に釋万葉集にも此書に勅撰の體にあらさるよ論とられしうちろとれい
赤基法師の和歌もまきれて後に國へ入りあらんなし野つ
菊岡沾涼云く往古平不の辺海面より頃い當山を仲とうへ律の母の月尚に
あるりを山の名と学し新馬鈴の地を出分といの也望山に国ある名とり
論にる不うて山川の形勢も千載を移れいけ わ ぬよ
頃この生山のめくりの土を穿ち玉と築玉るとひ待へそれいとの岡いるくい狩高切しるく

聖天宮　真土山にあり　別當に天台宗金龍山平龍院と号く傳云大同年中の勸請

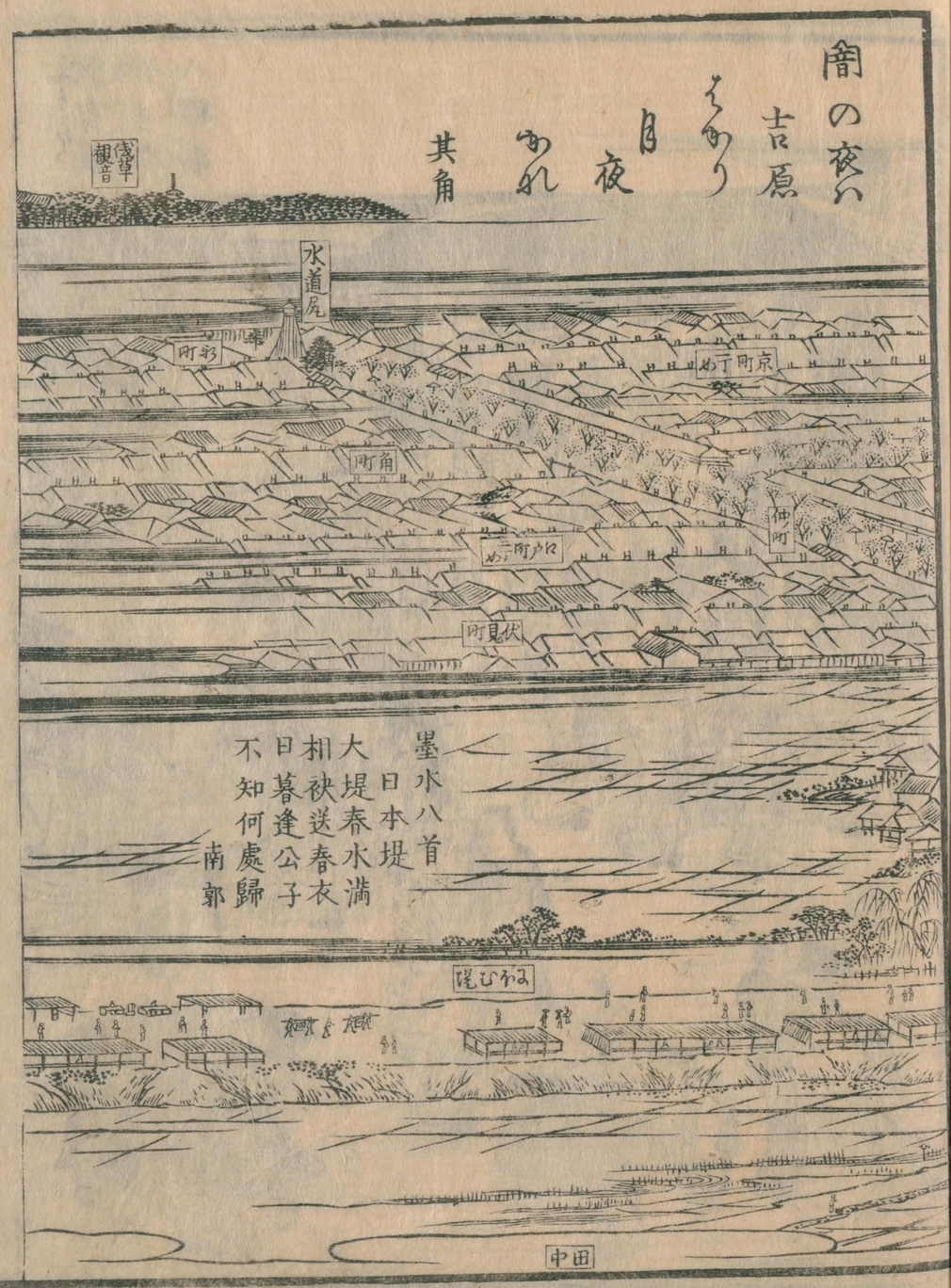
めて江戸聖天宮才一の霊験ありとひく　和漢三才図會江戸鹿子等の書に森蘆別當
辨財天祠　山の禁鹿池の中嶋にあり平政子　実盛除くる信の霊像ありといふ
紫そるの霊像ありとしの
牲所今い形ちもありの丘陵あれと東の方を眺をすれい墨田河の流い長堤
小傍と溶くたり近くい葛饒の村落遠くい國府臺の翠嵐まてとも

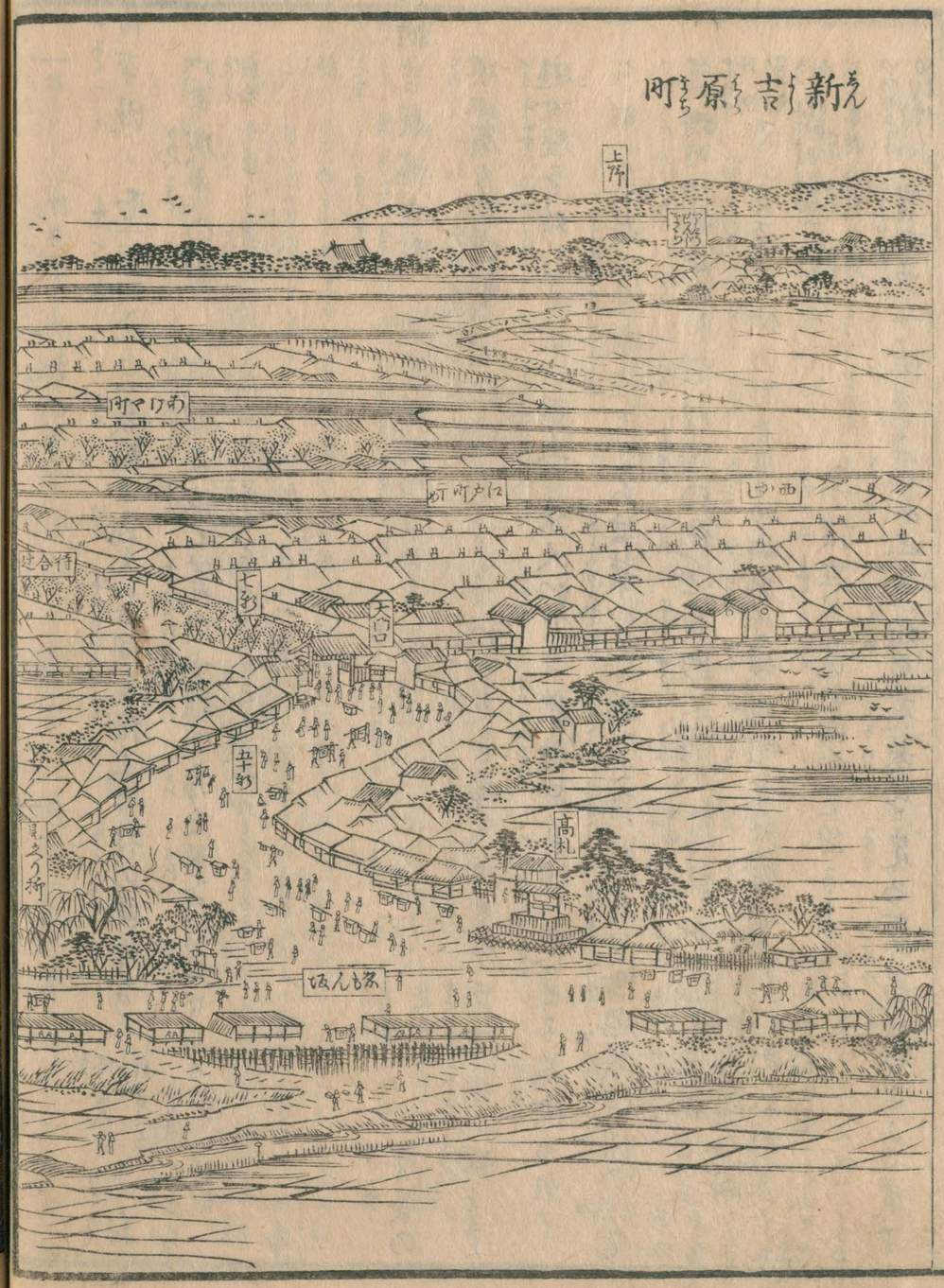
一名ふの風色を幽趣あり

日本堤　聖天町より義輪に至る其間凡拾三町程の長堤なり　侍従八丁　元和
細まと云
里諺に見返須

六年庚申の歳　台命に依て荒川水除の為に是を築せらる　國の大諸侯
台命を奉し是役所に　水戸侯　庄司叔入森あくい出る元文三年の印本御府語
とのの草紙に日数六十余日にて成就しあれい日本堤と号ふるとのふまつ
徳泉寺のめくりの除の堤一条あり此堤をあらそそ二条なり侍に一本二本なりといふるとろまて二本堤
と号しるとそ

新吉原遊女町　日本堤のりにあり俗に五丁町と唱へたり　其襴立町ある　慶長の
頃江府に増繁業の地とあり諸れい是を傳へ角駿列元吉原の驛に
遊女屋を始めとする葦二十余人江戸に移住と其頃い定まる花街もれく
なりとに往女屋散在ちくい彼葦官に訴へて京橋具足町の東泥沼の地を
築埋め一方に是を儀け南の側を角町と唱へ　今の京橋炭町是也　北の側を柳町とい　今の京橋
新町　又中の通を仲の町と号け妓地に傾城町を定発を　今京橋具足町と柳町との間
仲の町の四隅をとるのさる使拠なり　其後庄司甚右衛門と始甚内　南北の通を中通といふ　桐列小田原の産なり始甚内
以上事跡合考に載るところなり　官の免を得て元和三年始て花巷を定め葦屋町のまとて貳丁





国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 124-114
ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 124-114
ガラス使用

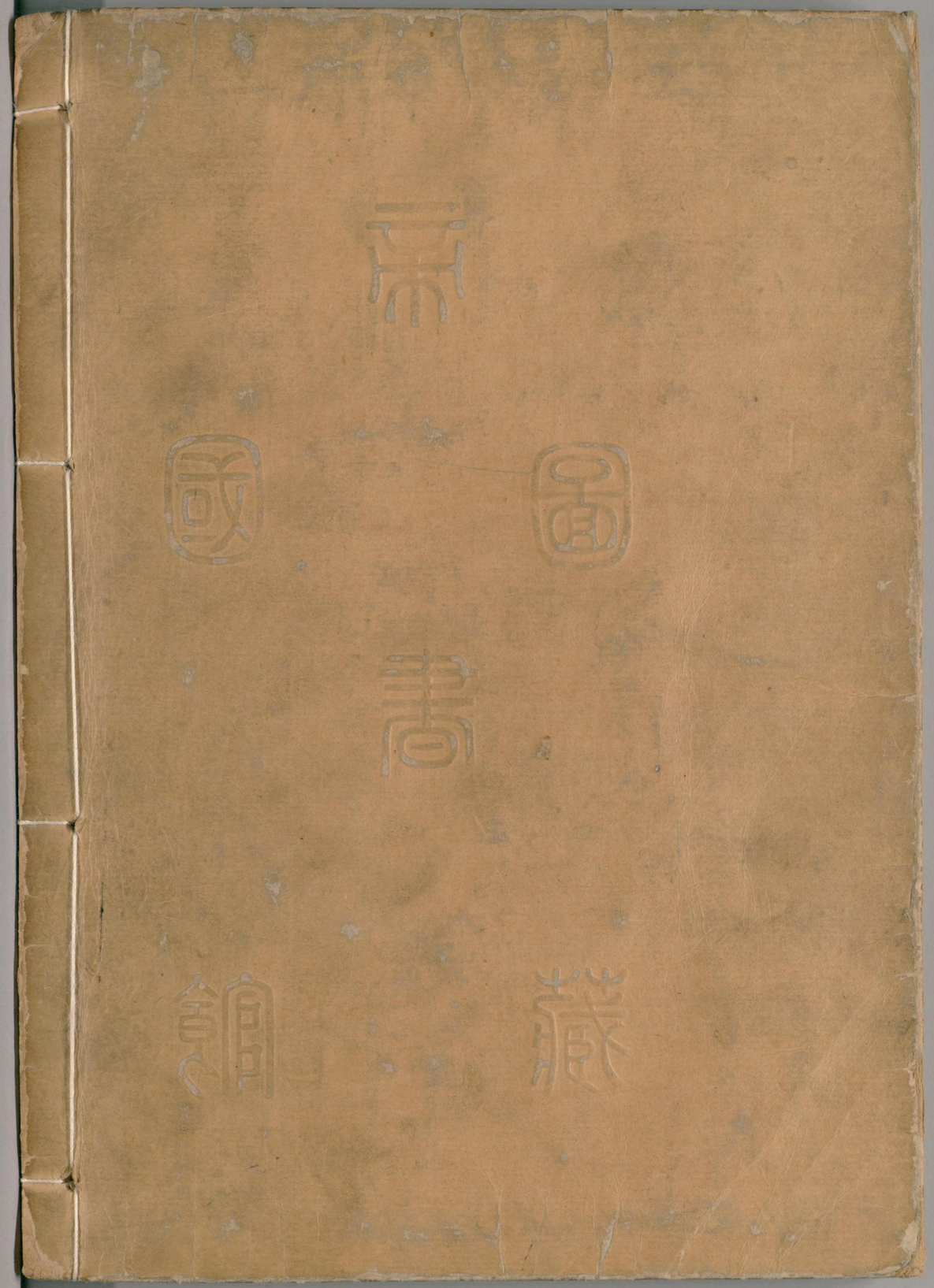
四方の地を賜ひ是を成吉原町と号く　今所謂和泉町高砂町住吉町難波町等其間地をうりとりまく菊岡沾涼云其地沼なりと蔑蠢の名鑑載
ちなを開く故に殷富なるものゝ地を買ひて吉原と作るとなり或ハ事跡合考をうひあるとこの号ありとも云
元禄年板の江戸鹿子なるの書あり其始發別元吉原よりうつると敬るこの号あり　翌年普請
落成せ然る江府益繁昌し人物萬をあれい明暦二年の冬竟に今の
所に賜ふ明暦三年丁酉八月今の地なり　依て新吉原町と号るとゝ是世花柳いまとと
ゝ三都の魁たるを其賑ひ特弥生の花の頃をりて勝れり春宵一刻の價
千金を顧を初秋の燈籠ハ万字屋の玉菊ハ追福よりまを八朔の白重ハ
巴屋の高格より起る今も牡月をりて更衣の節ゝと名よ牡丹二度の月えの
全盛ハいつもさらなるを悪く其美を挙ふとまあゝと志ひらゝ此処ゝ
是を畧と

江戸名所圖會開陽之巻終

124
20
114

国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 124-114

ガラス使用



国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 124-114

ガラス使用